

暗殺する教室で生きていく

SiriusSTAR

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様なんていない。

今まで願って祈って縋って悟ってしまったこと。

それから何年も経ってから起きてしまった。

気がつけば来た覚えもない森に。

所詮は夢。

夢に出てきたものを否定するも、それは否定出来ない事実に変わる。

帰れない世界に閉じ込められ、人と接する術も知らないまま……

みつともなく生きてきた異世界の者がひよんなことから知らない世界で勉強し、先生を暗殺し、頑張って生き抜く話

目次

真つ暗の時間	prologue	1
取引の時間	1話	6
自己紹介の時間	2話	11
暴走の時間	3話	21
勉強の時間	4話	28
テストの時間	5話	33
人間の時間	1時間目	37
人間の時間	2時間目	43
修学旅行の時間	1時間目	50
修学旅行の時間	2時間目	55
修学旅行の時間	3時間目	60
所有者の時間	1話	65
反対色の時間	1話	71
白の時間	1話	77

真つ暗の時間く prologue く

真つ暗な場所、光りも指さない場所に自分は落ちていた。
なんで自分が落ちているのか、自分はどこから落ちてきたのか
落ちて行く先はどこなのか、着地出来るのか

じぶんはシヌのだろうか

自分の考えているそれに気持ちは動かない。

ただただ自分は落ちているということ

上も、下も分からない。ただ落ちるといふ感覚なのだ。

恐怖も、疑問も本当は抱いていない。

自分は落ちている。考えているそのことを無心に意味もなく受け止めていた。

風を感じた。鳥の囀りに葉のこすれ合う音。

ゆつくりと瞼を開けると自分は寝ていたのかと気付く。起き上がるとまるで体が眠いと言ってるかのような重さで拒否反応を示す。

それでも無理矢理起こして周りを見ると、森。自分はいつ森の中に入ったのだろうか。

耳を澄ませてみると別に人の声も生活音もしない。魔物モンスターがいる様子もない。

体の重たさに、今の状況判断よりも寝ていたい気持ちが大きくなり後回ししようと再び体を地面に預け瞼を閉じる。

考えるのは後にしよう。今はどこか疲れているのだろう。後3秒も経てばきつと眠れる。

そう、思った。

「×◎」

「!?」

頬に何かに触れるのと同時に人の声で一気に起き上がる。刀の柄を手にし警戒態勢を取る。鞘からいつでも抜く事が出来る状態、いつでも辻斬りが出来る状態だ。

それにしても気配に全く気付けなかった自分が悔しいと思った。相手によつてはあそこで殺されている可能性もあった。

確かに疲れはあったけれど、それも言い訳にすら出来ない自分の甘さがあつた。

改めて相手を見据える。何もして来ないのはおかしい。

「△×□▼●……」

「……う？」

喋る空気だと察して怪訝そうにも喋り始めてくれたがどうにも言葉が聞き取れない。なんなんだこれ……

まるで全く見覚えのない言語を聞いているかのよう。喋り終わったにも返事を返せずにいる自分にイラついたような表情。

……一応、話してみよう。

「お前は、なんだ。敵、なのか？ここは、どこなんだ」

「……◎◆○……」

頭に手を添える仕草。こちらの言葉も通じないようだ。

どうしようもないことに堪え兼ねたのか突然柄を手にしている手を掴む。

「何を……！」

鞘から抜こうと決めた瞬間、一瞬にして意識は途絶えてしまったのだ。

Another side

どさつと倒れ込んでしまった異文化人さん。

別に俺何もしないんだけどなあ、と倒れ込んでしまった人の顔を覗き込む。随分と顔色が悪そうだった。が、俺の意識は違う方向に向

かった。

「え、この人女の子だったの……」

まるでRPGのゲームに出てくるようなスピード型のアサシン職業みたいな服装(装備?)のこの人は黒髪のショートヘアでその姿からは女っ気0の格好。

胸は……肩を押して仰向けにさせ一応服の上から触れてみるけど、一応膨らみはあるという感じかなー?

それにしてもこの人起きないな。突然倒れ込んだ事だし一応運んであげるかあと俺の珍しい良心で、一先ず危険物の刀を押収する。

「……これ本物?」

女の人の腰に提げていた刀を持つてみると意外と重みを感じる。やっぱりあのゴムナイフとは違うもんねと思ひ耽、好奇心で刀を抜いてみる。

柄を手にした瞬間、バチツと静電気のような物が起きて刀を落とすてしまう。強烈な痺れに数秒声にならない声が出る。

なんだよこれ……不良品?でもこの女の人普通に柄握ってたよね……

恐る恐る痺れた手の拳を開けてみるが火傷のような外傷はない。

それでもあまり柄をもう一度持つ気にもなれず、先に女の人を抱き上げ落ちた刀の鞘部分を持つ。

地球を消滅させるタコの次は魔王討伐のパーティーメンバーかなー?

もうこの世界有り得ない事もないんじゃないのかなんて思いながら女の子抱えてみんなのいる校舎へと向かった。

A n o t h e r s i d e f i n

また、真つ暗な世界に独り佇んでいた。今度は落ちている感じもしない。一体なんなんだかもう訳が分からなくて、ふとなんだかこの一

連も全て夢だったらしいのに、と思う。

ゆめだったらしいのに……

ユメだったらしいのに

夢、だったら……

「ゆめだったらしいのに
アンタアそれで何が救われるのオ？」

空間に響くような耳に響く高い、けれど萎縮してしまうかのような声。でもそれがどこからか発しているのかが分からない。

「誰……？」

自分の声もまた、空間に響く。ここは、夢の中じゃないのか？

「きやははは！いいのオ？アタシのこと聞いちゃってエ。アンタ絶望するよオ？」

「……」

「でも教えちやあう〜！アタシ絶望する顔だあいすきい〜！」

返事をする間もなくどんとどんと声だけが響いていく。

「アタシはア、大変なトラブルに巻き込まれちゃった可哀想なアンタを助けにきた神様ア！」

神、様……

神様と名乗る人は私を放ってただただ高い声で笑う。

が、それは突然止まる。

「……アンタつまんない」

「……は？」

「あーあー！外れくじ引いちゃったアー！もつとオ絶望で泣き叫んでくれたりしないのオ？」

無茶ぶりを言ってくる彼女。その神様はまるで純粹でふざけた悪意で、まるで子供のようにも思える。

心底詰まらなそうな溜め息を吐く音がした。

「言葉のとおり心ここにあらず、ね！ちやっちやと話しちやうよオー！」

アンタは違う世界に移転しちゃったのオ！言葉も文化も当たり前もぜえんぶ違う世界！

まア来ちゃった事にアンタの罪はないからアアタシが来たってわけエー！」

違う世界に、移転……随分とスケールの大きい話に巻き込まれてしまった。

考える暇も与えずにどんどんと神様は話を進めて行く。

「ほオんとならア神は人に干渉しちやいけないんだけどオ！しようがないからこれだけあげるわよオー！」

そう言われて突然首筋に熱くなる物を感じた。襟を掴み見てみると小さくて赤い石がついたネックレス。

これがなんの役に立つんだろう。疑問のままに問うと

「興味でてきたア？これは聞こえる言葉を勝手に翻訳してくれる宝石イ！まアそれさえあればなんとかするのが人間ってもんねエー！」

さアてと！アンタは暫く向こうに帰る事が出来ないしイ？アタシに助けを求めることも出来ないのオ！

精々足掻きなさいねエー！」

「暫くつて……いつまで」

その問いも虚しく、ただただ空間に響くだけの言葉になった。

取引の時間〜1話〜

目が覚めた時、そこはどこか白い室内のベッドのような物の中に私はいた。……結局夢、だったのか。そう思うと突然拳が熱くなった。この感覚は……覚えがあると思つて拳を開いてみると、赤い石のネックレス。

「神様、か……」

自嘲の笑みの眩き。目頭が熱くなつて、握つていたものごと一緒に拳を目に押し付ける。色々世界は巫山戯過ぎている。

まだ状況確認も、情報すら得られてない中で勝手に現れた神様ごときは言うだけ言つて押し付けて。確かに神様はいたという証拠を残し、私はここに居るのだ。今まで何度も祈つた。今まで何度も祈つて居る人たちを見てきた。何度も何度も見て、そんなもの叶えてくれる者なんていないと既に悟つてしまった私に現れた、どうしようもなく絶望が好きでな神様。今までの私の人生もとんだ茶番じゃないか。

これが神様の望んでいた絶望なのか。上体を起こし、反対の手で目から流れて来るものを触れようとするがそんなもの流れてもこない。

「□×●●」

「ッ!?!」

突然すぐ近くから感じた気配。手元に武器はなく、警戒態勢を取るしかなかった。恐らく倒れたときに押収されてしまったのだろう。

今度はどこかヤバいと思つた。それは恐らく人間ではない。聞き慣れない言語を相変わらずずっとから発しているのだろうが黄色い球体らしきものの顔に描かれた口は動いているようには思えない。最早それは人の肌の色でもないし、人の大きさよりも明らかに大きい。そして何より服の布から恐らく手であるのだろう触手らしきものが見える。

これは……魔物^{モンスター}?でも別に敵意も感じないし、今でも何かを喋り続けている(……のだろう)から友好的なものなのだろうか。喋り続けているそれに制止のジェスチャーをすると相手は言葉を止めた。警戒は解いてはいけなければならないけれど、通じなければこれは使えないし。そ

う思つて拳の中にあつたネックレスを首にかけて。

……得に変わった感じはしないけれど、一応話しかけてみよう。

「……言葉、通じます、か」

「…ヌルッフ、はい通じてますよ」

……ぬる？なんだろう、この言葉のものだろうか……？翻訳はされてないものもあるのかと納得して受け入れる。

何か……何から聞き出せばいいのか。いやまず、安全だ。

「貴方は敵ですか」

そう言つて訳も分からない生物を睨みつけた。敵……もし何か不審な点があれば、効くかどうかは分からないが体術で……。逃げ道はその四角い窓らしきもの。頑丈な作りだろうが少し開いているので問題ない。武器は……でも大丈夫だ。ここまでみつともなく生きているのだ。最悪誰かを脅してでも。考えが纏まったその瞬間に生物は声を発した。

「大丈夫ですよ、私はあなたの先生です」

「……は、い？」

先生？意味の理解が追いつかないそのとき扉が開いてちゃんとした人の、男性が入ってきた。入ってきた男性はこちら、主に生物の方に目を見開いた。

「貴様！何故ここにいる！」

「まあいいではないですか、これから担当する生徒の心配くらいさせてくださいよ烏丸先生」

その、からすま先生と呼ばれる人はおもむろに緑色のナイフのようなもので生物を斬りつけようとするが狭いこの部屋の中、かわす場所もなくどこからか取り出したハンカチのようなものと一緒に触手で挟む。状況の、判断が追いつかない。この人たちは敵同士なのか。生物は私の先生と言つて、つまり敵ではないということだから……？

「このナイフも手入れて差し上げますから。その間にこの子の説明でもどうでしょうか？」

「くそっ……すまない。気分は大丈夫か、言葉は通じてるか？」

「あ……大丈夫、です」

なだめられたその男性は手に細長い布で包まれた何か……私の妖刀ようとうであろうものを持つている。敵意も見られない。が、私を警戒しているかのような目で見られているのは確かだろう。

いつの間にか生物はハンカチでナイフを挟みながら決して触手と触れ合わないようにナイフを磨いている。……いつ、窓のそばに椅子を出したのだろうか。先ほどまでなかったと思うのだが。

「……君を助けた人物からは言葉は通じていないように思えた、と聞いたが」

「え、つと……このネックレスを身につければ言葉は翻訳されるそうです」

そう言っって首にかかっているネックレスを見せる。

多分、この人に今少しでも嘘をついたらまずいんだと思う。だから、必要最低限の事実を話す。にしたって当然怪しさはあるのだろうが。それでも私の武器を取られていて、尚かつ生物に逃げ道の窓を、男性に扉の逃げ道を確保されている状態では逃げようにも逃げ切れないのだろう。そもそもちゃんと立ち上がることも出来るか分かっていない状態だ。

「……さっきまでそのようなものは持っていなかったようだが」

「目が覚めて、そしたら持っていました」

「確かにこの人は嘘をついてありませんよ、ちゃんと実証済みの監視済みでしたからねえヌルフフ」

生物は口を挟むようにそう言っつてのけた。

……監視、されてたんだ。いつからいたのだろう。この生物はどこまで分かっているのか、それがこちらに理解出来ないから怖い。

「後でまた聞くとしよう。本題に移るが、君は何者だ？どこから来た」
「……………」

「異様な格好であの校舎近くの森で何をしていた？森に入るには校舎の前を通る必要があるが生徒は誰も見ていない、近所の方も見ていない。

おまけに調べてみればどの国にも君の情報は載っていない」

「私は……………」

こんなことを言って信じてもらえるのだろうか。私ですらちゃんと確認出来ていない世界。確かにこんな服装を来ている人もこんな生物も私は生まれてこの歳見た事がない。だとしても……こんな私一人の言葉なんて聞いてもらえらるのだろうか。

「信じてはもらえないでしょうけど……違う世界から来ました」
「成る程、な」

とても短い納得の言葉に意味が分からなかった。そんな簡単に信じるものなのだろうか。

「とても信じがたいが……君の服の素材なんてこの世界にはない。この抜けない刀も、だ」

「又ウ……」

布で包まれた刀を私にも見えるようにすると生物はどこか萎縮した。……多分、鞘から抜こうとしたのだろう。

「それは、他の人には抜けません。妖力ようりよくの持たない者が触れば暴走する可能性もあります……その様子だと誰も暴走してはいないようですね」

「……ここは剣や銃を持ち歩く事を禁止されている場所だ」

武器の禁止……？何故そんなことを……魔物がいれば人間武器なければ対処出来ない。

「大丈夫なんですか!?!そんなことしたら魔物モンスターにいつやられるか……！」

「モンスターなんて、この世界にこの私しかいませんよ。まあここ一年は別に誰かに危害を与える気はありませんがねえにゆるふふ」

何故か、そのモンスターは顔の色を変えた。黄色い顔に緑のしましま模様。……顔の色、こんな鮮やかに変わるモンスター。スライムのようにも思えるけど何かどこか絶対的に違うと思わせる。

ここ一年……どういうことだろう。その言葉に男性は深い溜め息を吐いた。

「君に頼みがある。衣食住全て用意しよう。一切君に負担させない。

その代わり学校に通いこの教師を一年以内に暗殺して欲しい」

何もない私にとっては理想的な取引で。長期期間な依頼、けれど

「教師を、殺す？この生物をということですか？」

「ああそうだ。こいつは来年の3月に地球を破壊する。この前は月の7割りを破壊し三日月へと変えた」

「殺せるといいですねえーマツハ20の先生に、にゆるふふ」

「……はあ」

自己紹介の時間く2話く

Another side

「ということとで異世界の本業暗殺者さんがこのE組でみなさんと暗殺するそうですく！」

ターゲットの隣で怪訝そうに、そして肩を竦めて小さく首を動かしか会釈をする女の子の暗殺者。

その人はこの間の全校集会が終わった時にサボっていたカルマくんが森の中で見つけてきた。まるで僕たちの世界にはいない、ゲームに出てきそうな姿をした人と不思議な剣。

異様な姿に僕たちは言葉を失った。カルマくん曰く倒れていたところを見つけて、一回目を覚まして話してみると言葉が通じない。で再び倒れたのだと。

「全くこんな子がこんな危ないものを持ち歩いて……にゆわあ!!」

そこでもまた僕たちに衝撃を受けた。殺せんせーは恐らくその刀を食べようとしたのだろう。だけれどその刀の持ち手を持った途端、先生の触手は破壊された。そのまま刀は落ちる。

まるで僕たちの持つ対先生用ナイフと同じ。だけれど

「なぜだ……!?……いつの効く武器は国が開発したもの以外はないはずだ……！」

全員分のナイフと銃を渡してくれた烏丸先生もまた、動揺に陥った。

「それ、多分この人にしか抜けないよ。柄を握つてるところ俺見たし。あ、鞘部分は持つても問題ないからく」

けどまあせんせーの触手が効くとは思わなかったけどねー、と呟くカルマくん。軽やかに言う言葉とは裏腹に右手を握ったり開いたり、何度もそれをしていた。カルマくんもまた、剣を触ったのだろう。そうしてみんなの注目は女の子の人から刀へと変わった。

僕はなんとなくその刀が禍々しい雰囲気が出ているように思えて、睨みつけた。

あの時とは打って変わって柵ヶ丘中学の女子制服。クラスの人に見られている事が落ち着かない様子で、僕は内心普通の子なんだと思った。

「はい、自己紹介を宜敷くお願いしますねえ」

「き……如月、琴音です……」

消え入りそうな声はとても暗殺者の人とは思えなかった。

A n o t h e r s i d e f i n

「ぬう、もう少し大きな声で名前を言いましたよう！」

こう思うと私が学校に入るのはまずかったのではないか。例えばこの服装も、私のいた世界にはない服装で風の通りが感じ易いためどこか落ち着かない。この状況にしても私は今まで人と接することも必要最低限で子供たちが喋っている様子も遠くから見ることしか出来ず、いざ言葉にするのも恐ろしく感じる。今更、こんなことを後悔しても遅いのだけれど。

先生の言葉に会釈で返し前を通る。恐らくみんなが座るような空いている椅子と机の場所、多分私の座る席なのだろうと察し部屋の奥の方へ向かう。

「もう元氣そうだねえ。まあこれからよろしく」

隣の席に座る赤い髪の男の子が握手をしようと手を差し伸べてくる。……そういえばこの前初めて会った、烏丸先生曰く助けてもらった人なのだろうか。なんだかその人の笑みが胡散臭く感じる……。渋々無言で差し出した手を彼は受け取り上下に揺らしてその手を離した。

「先生無視されて悲しいです……カルマくんは嫉妬します……」

教室の隅っこでいつもなら大きい体もこの時は縮こまってめそめそ泣いていた。周りからは元氣出しなよーとかめんどくせーと言う

言葉が先生に投げかかる。隣のカルマくんとやらは先生に向かって挑発気味に舌を出して笑っている。

私は……さらつと1年過ごせてさらつと暗殺終わって、それで元の世界に帰ればそれでいい。その考えにあの言葉が思い浮かんだ。

——夢だつたらいいのに、アンタアそれで何が救われるのオ？

思い浮かんだくせに、その言葉に言い返せる考えもない。数秒してその問いに対する答えが

いつもの日常に戻ればいい

そんな答えだった。

一時間目という授業が終わる合図の鐘の音。感想を言うとするれば疲れた。

赤い石に触れてみる。これは言葉の翻訳だけで決して書き物に関しては影響してくれないことを知っている。入院中は授業が終わった放課後に先生がこつそりマツハ20で来て基本的な文字は教えてもらえたけど（そのついでにもらったばかりのナイフを使ってかわされたけど）。今もまだ基本的な文字は覚えきれてない自分が、当たり前前の中にいてそこで勉強というのも酷なものだと内心思う。深い溜め息も出てしまう。

「きつさらぎさーん！」

う、わあ。その言葉はどんどんと席の周りに人の群れが出来て行く。

「どう？勉強はかどってる？」

「あ、あ……あんまし……？」

「聞いたよー文字まだ覚えてる途中でしょ？纏めきれなかったらノート貸すからいつでも言ってるね」

「あ、う、ありがと、う」

「随分と緊張しきってるねえ」

席の後ろから、主に私の顔の横に顔を出して来たカルマくん。人の近さに、多さにやっぱりどうにも慣れない。どうすればいいのか本当に分からなくて言葉がついたとどしくなってしまう。翻訳されて

いるにも関わらず、だ。

「暗殺者って感じはやっぱりこう見るとしないよな」

「うんうん普通にシャイな女の子って感じ」

シャイ……そんな言い方をされてしまった。結構みんな同じような感じで私を見られているのだろうか。

人は集まって話しかけてくれるもののちゃんとした名前もまだ分かっていなくてそれが気になってしまう。そもそもちゃんとした会話が出来ている気もしない。話しかけてくれた言葉に相づちか感想を言うくらいで。

「ねえ、如月さんのいた世界ってどんなところだった？」

水色の髪をした男の子がそう聞いてくると皆気になっていたようで、私も聞いてみたいーとかそんな反応がちらほら。

「どんな……ど、どういうことを言えば……」

「じゃあ武器持ってたけどやっぱりなんか倒さなきゃいけないやつとかいた!?ゲームにでてくるような!」

倒さなきゃいけないやつ……?ゲームにでてくるような……?意図や意味が分からなくてどうにも返事がしづらい。

「馬鹿前原。そんな言っても如月には通用しないだろ?」

「まあぶっちゃけて言うのと殺せんせーみたいなモンスターのことだよ」

カルマくんの模範解答は分かり易いしありがたいけど両肩に体重を乗つけてくる……。重いし痛い……。けどそれを言うタイミングが分からない。

「魔物モンスターならいるよ……最も先生みたいに友好的で理性と知識兼ね揃うモンスターは初めて見たけど……」

「おおーやっぱりいるのか!倒したりするのか!」

「そりゃ……倒さないと殺されるし……」

前原、と呼ばれた人はやや興奮気味に、いや多数の男子が興奮気味に思える。私の思う想像の世界がこの世界のように、彼らもまた世界に憧れるようなものなのだろうか。魔物がいない、武器も必要ないこの世界は私にとって不思議な感覚で、みんなに保証されてる安全が少

し羨ましく感じる。

それでも向こうの世界とこちらの世界の会話の輪というものなのだろうか、同じように広がっているように思える。これは私が遠目で見ているものと同じなのだろうか。

「あ、殺されるだけじゃなくて町にも入って来られると武器を持ってない人とかもいるし……後は荷物だったり食料を盗まれたり」

「や、やっぱ世界違うっていうなんか現実味とか実感を感じる……」

「如月さん暗殺者なんだよね？」

「ええと、まあ……」

メモを持ってペンを持って私に聞いてきた言葉。

こんな簡単に人に暗殺者だなんて聞くのかとどこか違和感を感じる。それもこのE組だからなのだろうか。明るい、殺意にどこか恐さも感じる。これがこのクラスの特徴……。

「どう？・殺せそう？」

「どう……だろう」

先生の暗殺のことだろう。入院中はまだ一回も一撃を当てられてないけど。そもそもマツハ20というのも非現実に見える。というかマツハ20がどれくらいなのかもよく分からないし。

「背後から回っても早いんじゃないじゃ逃げられるし、そもそもあんまり情報がないから……」

いつもやっている暗殺方法は影に隠れ背後に忍び込み一撃の急所を狙う。基本はそれだし、人混みが多い中でもそれは実行出来るけど、自らターゲットと言ってくるものなんて見た事がないし経験がない。あそこまで曝け出されてしまうとどうにも……

「如月さんが持っていた剣？触手一本やったよね」

「え？」

「あ確かに！あれなら殺れそう！鞘から抜いた状態じゃ受け止めようがないしー！」

「じゃあ今日それで決行してみようぜ」

「ご、ごめん、今日妖刀ようとう持ってきてない……」

「じゃあ仕方ないけど後日かあ……」

「ま、それまでにちゃんと計画を練ろうぜ！」

どんだん言葉が交わされる空間の中で、私は完全に違う事を考えていた。やっぱり、あの先生刀を抜こうとしたのか……。

みんなも刀を警戒しなきゃいけないことを知ってる。そうだとすればここに来て、最初に触ったのがあの先生。警戒した方がいいのかな。あの先生が暴走したら……それこそ世界が崩壊するんじゃない……。

「ね如月さん、渚、律儀に殺せんせーの弱点をメモってるんだよー」

「茅野……いつか役立てるかもしれないでしょ？」

声を呼びかけられ考え事を放棄する。水色の髪の子を渚……くん？緑の髪の子を茅野ちゃんか。2人は随分仲が良さそう。

弱点のメモかあ。確かに情報に役立つかもしれない。

「見てもいい？そのメモ」

「あ、うんいいよ」

そうやって渡されたメモ。渡されて気付くけど読むのは難しい。翻訳されていないから、文法とかそういうのも分からないのだ。

未知の文字に数秒睨みつけて降参の言葉。

「ご、ごめん……読んでください……」

「あはは……えつとね……」

未だノートも授業で聞こえた言葉は向こうの文字を使う事もある。本当に困る。今まで色んな言語や文字を小さい頃に覚えさせられたけど、どの文字とも全く違う感じの文字なのだ。先が思いやられる、と思わずぼそつと呟くと後ろから

「あーそろそろ中間テストが始まるし如月さんは大変そうだねえー」

その他人事のようなカルマくんの声。いや確かに他人事なのだろうけれど。それにしてもちゆうかんとすと、というものがどんなものなのかよく分からない。今日の放課後は先生に勉強を教えてもらおうか……。テストというのはなんとなく試練、みたいなものと自己認識をしている。勉強の試練。

完全に私の頭から妖刀ようとうや暗殺のことは抜けていた。

「確かに如月さんはみんなよりも大変な状況下で勉強をしなければいけませんねえ」

放課後、早速先生の元に向かった。勉強熱心と触手で頭を撫でられて私の席で今日の授業のノート内容を見せていた。

そのノートはもちろん、全てが全て追い付かずどころどころ文字が抜けていたりする。まあいろんな理由があつてノートをとったりするのが遅くなるのだけけれど。

「この文字はなんと読むのですか？多様されているようですが」

「あ……えつとこちらでいう数式の累乗根です……。どうにも記号覚えられないしで……」

「ふむ……こちらのノートは」

「忍者、です」

「にゆる？〴〵さむらい〴〵ですよこれは」

侍、とその場に書かれてそれ以降忍者という言葉は出て来なくなつた。ちゃんと侍と聞こえるようになる。

時々このように完璧に翻訳がされきれてない。困つた事に同じ言葉でこちらとあちらでは聞いてみれば意味が違つたということもある。

休憩の雑談でサムライについての話をusstてみた。

「私のところじゃサムライは武士じゃなくて妖力ようりよくを扱う人です……なんか、めんどくさいですね……」

「忍者は密偵、暗殺などを行う人たちですね。戦国時代に影で活躍されていました。」

悩める如月さんにアドバイスです。同じ言葉でも全く違う言葉だと認識するのです」

一本の触手の指を立てて落胆する私にそう言つてきてくれる先生。……暗殺対象と言つてもちゃんと教えてくれるから不思議に思える。

こんな状況でもナイフを刺そうとしてもかわしたりするんだろくな、と考える。

「簡単に言いますね……」

「そうですねえ、いつそのことここにいる間は向こうの言葉をリセツ

トしてはどうでしょう」

「簡単に言いますね！」

今までそれで生きてきてしまったのだから無理なものは無理なのだ。早く慣れてしまうのがいいのだけれど、そんな上手くないかなんだろうなと思った。深い溜め息が漏れる。一定時間が経ったためペンを机の上に置く。

「殺せんせー数学教えてー！」

「はいはい今行きますよ倉橋さん」

先生が倉橋さんという女の子の方へ向かう。様子を見ると教えてもらいながらも倉橋さんは問題に集中しながらナイフを先生に向かって刺そうとする。が、先生の触手で腕を掴まれ決して刺されないという状況で教えている。

「如月さんは全く暗殺しないね、自信ないのー？」

隣の席からのカルマくんの声。自信がない、か。にっこりした笑みで聞いて来る意味が私にはよく分からなかった。

「……そうなんじゃない？」

「へえ認めちゃうの」

あっさりとした返答にどこか驚いたよう。

暗殺、か。再びペンを取ろうとしてあることを思いついた。机の中に入っていたナイフを取り出す。

「当ててみせようか」

「楽しみに見てるよ」

「ありがとー殺せんせー」

「はい、今度はもつと工夫した暗殺をお願いしますね」

倉橋さんに見せた顔色は緑のしまし模様。渚くん曰く舐めてる顔、だそうだ。続きを教えようと私の席の元へ向かってきた。机の中でナイフを弱く握りしめる。多分、あのような動きと一緒に動きをすればきつと。

「じゃあ再開しましょうか如月さん」

「お願いします」

「ぬるふふふ」

戻ってきた先生は私のノートを覗き込む。会話を続けながら左手で握ったナイフを振り下ろした。先生は私の左手を触手で抑えた。先生の顔を覗き込むと緑のしましま。会話を続け、ふと隣を見ている。

詰まらなそうなカルマくんの顔。そうだよね、これじゃ倉橋さんと同じこと。でもね、私はこれを狙ってたんだ。この世界こにいる人たちには分からない。

だから2人の顔色は2、3分経った突然に変わった。

左手で握っていたナイフは破壊し錯乱。拡散した一部のナイフだったものは先生の触手を破壊し1本、地面に落ちた。

「にゅやーッ!?!」

「…………え」

先生は顔色を変え直ちに私からマツハで距離を取り、またカルマくんは肘をつけて見ていた顔をわずかに動揺して上げた。

「先生、油断しましたね」

先生の顔を見ると緑のしましまは当然ない。だけれど黒板の側まで距離を取る必要があるのだろうか。そこまで萎縮するものか。

席を立ち上がり散乱した緑の破片を集める。その際カルマくんと目が合った。さつきまでつまらなそうだった顔も驚いた顔に。どう？と口パクで伝えてみせる。ムツとした顔を見せられる。

「嘘！如月さん殺せんせーの触手殺やった!?!」

「うんやったよ、ほら」

破片を全て机の上に集め、最後に破壊された触手を見せる。先生、返すよと触手を先生に投げると触手を大事にしてください！と叱られた。破壊された触手なのに……

「…………如月さん、手に力いれてなかったよね」

カルマくんの問い。それは半分正解で半分不正解。

「握力に力を入れてないよ。けど私の手、妖力ようりょくが流れ込むから、時間が経てばナイフみたいにバンツとね」

妖刀ようとうやサムライの里で手に入れたものを除く物であればどんな物でも時間が経てば私の妖力ようりょくに耐えきれず壊れてしまう。普段ならペン

でもなんでも時間が経てば、手に持ってたものを落とす、あるいは置く。ノートとる際も一々休憩を挟まないといけないから不便だけど、今回はこれを活用した。

烏丸先生から次は2、3本用意してもらおう……。

「先生いつまで怯えてるんですか……」

「……かつこわるーい殺せんせー」

私と倉橋さんがそういうえば顔色を赤くし始めて何かを言い始めた。まあ1回きりかな。まだ殺すにはどこかもつたいない気持ちがある。まあそう中々殺させてくれないのだろうけどと思う。

「時に如月さん」

「はい？」

「それは、他人の一部の体でもそうなりますか？」

「……まあ気をつけてますよ」

真剣な先生の声。後ずさりをする倉橋さん。まあそれは私が人間でない証拠だ。仕方ないことだと思ってる。

「因みに妖力ようりよくが出るのは手のひらだけだから、今まで間違えて破壊しちゃったなんてことはないし安心して」

なんて言っても無駄なのだろうけど。そうですか、では再開しましょう！と先生の声。それでもこの教室に、この4人に嫌な空気は残ったままなのだろう。

暴走の時間く3話く

烏丸先生は色々私に提供してくれた。それらは全て国のお金だと言う。

専用に用意されたつうちよう、と呼ばれるものに使っていいお金の記録がされているらしく、それを持ってぎんこう、と呼ばれる場所でお金を手に入れることが出来る。使うお金の額は1年を十分に生活出来る物だがあくまでそれは国のお金なので必要最低限、と釘を押された。一応消費した分や使う名目を記載するノートを渡された。

この間手に入れた紙のお金。私にしてみればただの紙なのだが、この価値というのは全てこれらのお金で決まるそう。向こうでは硬貨で、主に銅、銀、金の3種類のお金しかない。後は物々交換だったりで生活していたものだ。

こちらでは随分と細かく決めるんだな、というのが率直な意見だった。

そうしてそのお金と交換した今日の夕食になるお弁当を持つ。気がつけばかなり日が暮れている。

ここ辺りは駅の近くらしい。同じような制服を着た人が集団で駅の中を通って行く。

電気で動く箱が人間を運び遠くへ連れていってくれる。学校のクラスメイトは殆どがこれを使って自分の家に行くらしいが私は乗らない。烏丸先生が見つ付けてくれたのは徒歩で学校に通える格安のアルバイト、と言っていた。道は多分、駅のこの道を抜けたその先だったはず。

「やつほー如月さん。ここ辺りに住んでるの?」

「あ……うん」

赤い髪のカルマくん。妙に話しかけてくるような気もするが別にしつこい感じという訳ではない。いや、それは別にクラスメイト全員がそうかなと考え直す。道ばたで声をかけられ立ち止まった私たちは何故かその場で会話がスタートした。

「二人暮らし?知らない事ばかりなのに大変そうだねー」

「でもここはあつちより不思議なものがいっぱいあるし便利そうだよ」

「不思議なもの?」

きつと使う、そう言われて渡された。手のひらサイズの平たく四角いものをポケットから取り出した。表が黒く、そこに覗き込んだ私が見える。

「ああ、携帯ね。使い方知らないの?」

「携帯……向こうにはなかったし」

そう話すとそれを取り上げられた。私に見せてくるようにそれを使い始める。ボタンを押すと黒い面は突然色のある光で変えた。

「このボタンを押すと電源が起動。で画面を横にスライドするとメニュー」

よく分からない単語だらけで、恐らく話によると色を変える表面を画面というのだろう。ゆつくりと、けれど自由自在に私の前で携帯を操ってみせながらの説明はただ知らない言葉の繋がりより分かり易かった。

「ついでに俺のメアド入れるからこれで連絡してみてよ」

「……今?」

「今、歩きながらでいいからさ」

電源を落とされた状態で携帯を渡してきたカルマくん。まさか実践付きの授業か。はあ、と溜め息を吐いてたどたどしいながらも手順通り進めていた途中に気がつく。

「……歩きながらってどこまで?」

「えー如月さんの家じゃないの?」

悪戯っぽく笑う。……意味も意図も理解出来ない。カルマくんをずっと睨みつけるとその答えは返って来た。

「そんな見詰めないですよー。如月さんその様子じゃあ家にある電化製品使えないでしょ?」

なるほど。確かにその通りだと考える。でも別にそこにはカルマくんの得はないのだけれどもいいのだろうか。そのままの疑問をぶつけると

「人の親切心は素直に受け取ったら？」

「……押し付けと親切心は違う」

「如月さんは嫌なの？」

別に、嫌ではない。けれど無理矢理踏み込んでくるカルマくんの何かがどこか拒否反応を示してしまう。どこか何か感じる不快感を言葉にできずして数秒後に

「別に」

そう返すのが無難だと思った。

その間の無言が気に入らなかつたのか、会話はぷつりと切れ、メールを送る手続き続けた。もちろん面倒な事に数分置きにポケットに入れたり取り出したりを繰り返すけれど。

Another side

生徒たちは転入生の如月さんへの評価を「シャイな女の子」と評してきた。恐らく彼女の本当の「症状」を知っているのは私と烏丸先生だけなんだろう。

彼女が入院していた要因としては栄養失調。服の上からは見えないう体つきはガリガリで小さな傷が多かった。

彼女に向こうの生活としては満足していたか、と問えば答えは慣れていますの一言だった。小さな頃からの暗殺業。

そして入院中にもう一つの「病氣」が発覚した。

「失感情……か。当人はそれを普通だと思っている」

「普通なら他人から異常を教えるのですが、子供ながら影で生きる暗殺者の末路ですわねえ」

烏丸先生の手には学校に入る際の書類。彼女の調査書の備考の欄には失感情症と書かれている。

読んで字のごとく、失感情は感情を失うということ。彼女がそのことに異常にも思わず慣れているのだろう。どこにも生活の支障がなければ自らどうかしようという意識もなくなる。

入院中に色々なことをした。文字を教えた上で本を勧め、感想を聞けばたった一つの単語すらも言えないのだ。

今日の彼女の様子からしても、一時は興奮したように思えた。けれど無表情。決して表情の筋肉を動かす事もない。

「確かに……あなたはみんなよりも大変な状況下での勉強ですねぇ」
大変なクラスになった。けれど誰か1人を特別視してはクラスとして成り立たない。

職員室の窓からは暗くなった空とそこに浮かぶ一つの三日月。どこか遠い過去のことを思い耽る。

いつの間にか始まったノートパソコンのタイピング音に重なって唐突に聞こえたのは携帯のバイブ音。

「烏丸だ、どうした」

どうやら烏丸先生の携帯のようだ。彼は少し怪訝そうに数秒そこから漏れる音を聞こうとしている。

その数秒後、烏丸先生は声を荒げる事となる。

A n o t h e r s i d e f i n

「メールと通話の使い方は教えたから次。おじやましまーす」

どこかそのまま必要最低限の会話を続けているとタイピングがよく、説明が終わった頃にアパートについた。

私よりもさっさと部屋に入り込むカルマくん。……とりあえずお弁当をキッチンに置いて、お茶でも出すのが礼儀だろうか。

透明で向こうの世界にはないガラスのコップ2つとペットボトルという容器に入ったお茶を冷蔵庫という箱から取り出してそのままリビングに向かう。

そこには呆然と背中を向けて立つカルマくんの姿。ベッドの近くにある机にお茶とコップを置いてそのままこちらを向こうとしないカルマくん。

様子、おかしい？

声をかけようとして気がついた。気がついたときにはカルマくん

は私に向けて素手の「攻撃」を仕掛けてきたのだ。

向かってきた一つの拳。攻撃を手で受け流して行く。

勘違い、してた。暴走は先生には起こらない。

攻撃を受け流しながら退いた先は高さの低い机。そこに足を思わ
ず引つ掛けてしまい、ガチャンツ……！とコップは簡単に割れ散ら
ばった。

そしてその隙、カルマくんにも首を掴まれた。そして首を圧迫しなが
ら持ち上げる。

「ツー！」

「つかまーえた」

さつきカルマくんが見ていたのは妖刀^{ようとう}。一番最初に私が会ったの
はカルマくんで、倒れた時に助けたくれたのもカルマくん。なんで暴
走のある可能性の中に入れなかったのだらうと今更悔やむ。

どんどん手に力が入ってくのを感じ苦しくなっていく。もがこう
とカルマくんの腕を掴むがびくともしないし、触れ続けたら……

「く……あ……」

「やつと歪んだねえ」

歪む、がなんだか分からないけれどカルマくんの声を聞いて思い出
した。携帯、だ。幸いに今カルマくんは私を殺す事しか考えていない
のだ。

視界の端で携帯の通話機能を使う。連絡先が入ってるのは烏丸先
生とカルマくん。烏丸先生の電話番号をクリックすると自動でそこ
から通話が始まった。けれど、この状態じゃ声が出せない。

遠くで烏丸先生の声が出たような気がする。

「かる、ま、くん……」

「はは、やつと殺せる」

手に籠った力が強くなったのを感じた。苦しい。私に力が入らな
い。結局先生を呼んだところでカルマくんにはどうしようもない。

私が、なんとかしなければいけない。なんとさえばいいのか。咄嗟
に頭に出た言葉を口にする。

「し……か、りして」

酸素足らずの体はうまく言葉にできない。

妖刀は彼の殺意という理性を解放したのだ。妖力は元々負の力で、それに慣れてないカルマくんは半分妖刀に乗っ取られてると言ってもいい。理性を、カルマくん自身の意志を取り戻さなきゃ暴走が大きくなる。

元は妖刀が求める妖力がカルマくんにはこれっぽちもないのだ。もしかして私が少し流し込めば妖刀の力は押さえ込めるのか？妖力を流すこと本当は危険だけれど、やらなければ。

私はそつと、妖力が流れる手のひらをカルマくんの頬に添える。

「……？」

苦しい。私の意識も保たなければ。

確かに今手の力は緩んだ。後はカルマくんの意志の力しかない。

あと、もう一押し

「つか、るま……！」

「ーぎ、やらぎや……や！」

その瞬間手の力は一気に解け、重力のままに私は地面に落ちる。酸素欲しさに思わず体は咳き込んだ。

「大丈夫でしたか！如月さん！」

咳き込みうつすらと朦朧とした意識の中で先生の声がした。烏丸先生の電話で内容を察してマツハで来てくれたのだろう。

ようやく咳き込みも収まってきたところでカルマくんが自分に気付いた。

「え……俺、いま」

「カルマくん」

「違う先生！……私の責任です」

黒くなりかけ部屋に先生の殺気が立ちこめるその前に叫んだ。

「どんなことがあっても仲間を大切にしない者は暗殺者失格です……」

「カルマくんの意志じゃない！これは！」

「……ぬひよ？」

その言葉に数秒して黒い顔からぴよこんと音がするように黄色い

顔に戻った。

その場のカルマくんは意味が理解出来ないようにその場を呆然としていた。

勉強の時間く4話く

私の部屋の隅っこで事情を聞き終えた先生は恥ずかしい、という言葉
葉を小さく連呼していた。寧ろこっちが恥ずかしい、いや違うな。悔
しいかな……。上手く言えない。

妖刀ようとうを最初に触れたのは完全に先生だと勘違いしていた。よくよく
考えればモンスターモンスターの先生に害はあっても人間にはあるかないかな
んて確かめなければ生徒たちは危険だと察しない。

「……先生、恥ずかしいんだったら烏丸先生にもう大丈夫だつて伝え
てください」

「うつとーしいよ殺せんせー」

流石に10分ほどこの状態は聞いていたくない。この空気じゃ謝
罪をしようにも出来ない空気なのだ。

「お二人とも冷たいです……。愛情が冷えきっています……」

そう洩々玄関へと向かう先生。玄関先に向かつてご心配をおかけ
しましたと言葉をかけると、君たちの先生ですから、いつでも助けま
すよと。その次の瞬間に風が巻き起こって先生は消え、しっかりと家
の扉はしまっていた。

「……意識は平気？」

「え、あーうん。まだぼーつとはするけどねー」

明日になれば多分元通りのはずだ。以前にも暴走は起きた事があ
るけれど、その初回の暴走よりは小さい筈だ。

妖刀ようとうそのものは危険な意志を持ち、扱うものが未熟であれば意志を
乗っ取られる可能性がある。それが暴走。けれど暴走はそう何回も
起きない。乗っ取る意志は一番最初と決まっている。暴走の要因は
あまり分かってはいないがそう何人も一度に暴走は起こらないとい
うこと。それでもあまり触れさせないのがベストだけれども。そう、
説明をした。

「命の危険を及ぶような自体に申し訳ないです……」

「……別にそこまで堅くなる必要もないけど、生きてるし。というか
暗殺者が命を大事にさせるんだー」

「……暗殺者だから、生命を大切にする」

私の睨みつけは彼の表情を初めて変えさせた。まるで暗殺者は好んで職を選び、殺す事が快感に思われているのだろうか。その言い方にやはり不快感を覚えた。

やっぱりカルマくんはどこか好きになれない、そう考えた。

「さて始めましょうか」

一時間目のチャイムが鳴り、先生はそう言った。何十人もの先生が分身した状態で。

もちろん最初の一言の意味は皆理解出来なかっただろう。私でも理解出来なかった。というよりこんなことも出来るのかと思う方が大きかった。

分身した先生同士が会話でその意味を示した。例の中間テストというものの勉強時間のようだ。生徒数分の分身を行いマンツーマンで同じ時間個人に合った勉強をするそう。

「如月さんは語学や歴史を主にやっていきましょう。理数系は平均よりも上達してますしね」

「向こうの方が若干ですけどこちらの知識より上みたいですから」

こちらに魔法の概念がないだけだが数式などは生活上で使う事が多い。元素も成り立ちは同じようだし、生物に関してもさほど向こうと差はないんだと感じた。問題はこちらの文字翻訳だけで。

「ああそうそう、あちらの文字や記号を使用しても正解されませんか
らね」

「分かっていますよ」

アドバイザーを与えてくるたび触手を一本立てる。そうして始める前にネックレスを外し机に置いた。

先生から与えられたアドバイザー、向こうの言葉をリセットするにはこれが有効だと相談して決めた。基本の言葉は聞き取れるようにはなってきたけどそれでも分からない単語がある。その場合は私の合図を出してその意味を教えて欲しいというサインを出す。

ノートを見て、問題文を見て。分からないことがあったので先生に聞こうと顔を上に上げたら先生の顔は歪んでいた。

丸い顔に凹みが出来たように。何事かと思つて周りを見れば先生全員が同じ顔。

どうやらカルマくんが分身状態の先生に暗殺をしようとしたらしい。舌を出して愉快そうに笑つてる。

その様子を呆れたように見ていると私の視線に気付かれて、そっぽを向いた。私もノートに視線を移す。

あれから私が逃げるようにして関わるのを避けたら、彼の方から避け始めた。

まあそんなものか、と考えるのを放棄しそのままマンツーマンの授業を受け始めた。

今日一日はずつと同じような授業で、放課後もまた先生は見に来なかつたが勉強をするしかなかった。集団で固まって勉強する人たちや外で体育の授業にやったという暗殺技を身につける目的のゲームをやつてたりする人らはいしたが、流石にもう私に対する好奇心もなくなり1人で勉強するようになった。

別に私にとって囲まれているプレッシャーが抜けてとても楽だった。時々

「……あ」

「あーごめんねー？落としたの気付かなくてさー」

カルマくんにつつかつた際に机の上に置いたペンが落ち、無情にもペンはカルマくんを踏まれ安物のペンはそれに耐えきれず真つ二つに割れていた。それをわざわざ拾いカルマくんは破片までもを机のノートの上にはらまく。

「カルマくんどうしたの？」

「んー？別になんでもないよー」

「……？あ、如月さんまた明日」

どこか浮かない渚くんの表情が読み取れたものの特に気にも留めず、ばいばいというジェスチャーを私に向けるのでそれに頷いて視線をノートに向けた。

このように帰り際のカルマくんがちよっかい出されたり、明るいくラスメイトからも声をかけられることもあったがやはり私は1人気が付かないような影の中でやっているのが安心感を覚えるのであった。

その翌日、なにがあったのか先生の分身は突然4倍以上の数に増えていた。勉強するスピードが昨日より早くて思わず

「先生、ゆっくりお願いします……」

「ぬわっすいません、ではもう一度!」

結局この後も先生の教えるスピードは加速するものだから指摘して加速しての繰り返しで、この授業時間だけで5回ほど指摘する羽目になるのだが。

何をそんなに焦るのだろうかと思ってしまう。早くても数が多くても……前途多難、最近覚えた言葉の漢字を思い浮かべた。

授業終了のチャイムがなると教卓で疲れバテている先生の姿。何本の触手にうちわやら扇子で必死に涼もうとしている。

「……流石に相当疲れたみたいだな」

「なんでここまで一所懸命先生をすんのかねー」

先生を取り囲みある者はその様子に苦笑いを浮かべる者、またある者はナイフを手にする生徒。それを遠くで見ている私。

あの中に入れるような隙間がない。色々背負い過ぎて、隙間を通る為の鍵がなくて。そんなこんなで私は未だに独りで見ているだけだ。

「ヌルッフ……全ては君たちのテストの点を上げる為です。そうすれば……」

先生が語り始めた願望は、生徒がもう先生の授業しか受けられない、こんな先生殺せないと尊敬され崇められること。そして余計な願望として評判を聞いた女の子からモテたいというもの。先生は国家機密だから評判が上がる心配もないのにと考える。

「勉強の方はそれなりでいいよなあ」

「うん、なんたって暗殺すれば賞金百億だし」

「百億あれば成績悪くてもその後の人生バラ色だしさ」

百億というのは一般としてとてつもない額らしい。それこそ一生働かずに贅沢して生きて行けるような。だとしても私がもし帰れたとしてそれを向こうの価値にして戻す事は無理なことだし、特に気には留めていない。今生活出来ているだけで充分なのだが、生徒はそうもいかないようだ。このクラス自体の理由があった。

「俺たちエンドのE組だぜ、殺せんせー」

学校と言う生活環境の中での、ここは落ちこぼれの集まりだと言う。テストより暗殺の方がチャンスだと言う彼らはどこか諦めたような表情で。

「なるほど、よく分かりました」

「何が？」

突然の真剣な声に全員が全員注目した。

「今の君たちには……暗殺者の資格はありませんねえ」

黄色い顔に青のバツテン印。授業で間違えた時になる顔だ。

みんながみんな理解出来ていないそうで、そのまま先生は言葉を続けた。

「全員校庭へ出なさい。烏丸先生とイリーナ先生も呼んで下さい」

そのまま教室から出て行く先生。勢い良く閉ざされた引き戸の音は先生が不機嫌だということが表れる。

……ん？全員外に出ろと言ったんだよね。

渋々生徒と一緒に校庭に出る事となった……。

テストの時間く5話く

校庭のど真ん中に起きている竜巻。「第二の刃を持たざる者は……暗殺者の名乗る資格なし！」先生の言葉が響き渡った。

全員が参加せざるを得なくなった放課後の自習時間。クラス全員が50位以内を取らなければE組の校舎から先生は消える。あのマツハでE組から消えたらどうなるか。地球が終わる確率が格段上がるだろう。生徒だけでなく、それは暗殺の目的を担った先生らにも衝撃を与える事となった。

「あれ珍しい！如月さん！」

「……うっえつと……」

E組校舎のある山を下って帰宅していたところだった。E組の女子だった。記憶が合っていれば中村さんと倉橋さんと矢田さんだ。倉橋さんとは以前少しあったが、気にしないで接してくれるようだ。

「いつもこの時間には合わないしさ」

「あ……隣が、鬱陶しくて」

「隣？カルマくんが？」

意外と口々を揃えて言う3人。……意外？頻繁にやってくるものだからそういうものかと思った。

いつの間にかみんな歩幅が合っていた。自然と私が合わせていたのか、それともみんなが合わせてくれたのか。

「確かに殺せんせー相手にはいつぱい悪戯してたけどねー」

「思い当たる節とかはないの？」

「特に……」

きつかけは思い当たるけれど、別に間違った事を言った覚えはないし。ならばこれも相性の問題でしょうがないことなのだろう。黙っていれば問題はないはずなのだ。

「ところで、テストはみんなどう？」

「う、あんま考えないようにしてたのに……」

そう言ったのは倉橋さん。しよっちゅう放課後に勉強してる時見

かけるから大丈夫だと思っただけだ……。

「あーそっか、如月さん柵ヶ丘のヤバさ知らんもんねー……ねえ、如月さんって一々呼ぶのもあれだし琴音って呼んでい？」

「問題はないよ……ヤバさ？えっと」

「難しい、ね。名門校だから問題もちよつとね……」

難しい……そう言った彼女らの顔はどこか暗い。エンドのE組……転級する理由は様々だが主に成績の良し悪しで転級するらしい。成績が良ければA組へ、悪くなればE組へ。

「でも殺せんせーが逃げないように帰ったら頑張らないとね！」
「だね」

「そだ、終わったら放課後琴音含めた暗殺練んないな！」

そういえば、そんなことも言っていた。殺す気も起きないがみんなに合わせておくのが得策なのだろう。

「覚えておくよ」

E組の生徒は仲がいい。3人が始めた会話に私は適当に相づちをうっておく。ここでもまた、どこか独りだと感じた。

「本校舎とE組校舎、こんなに違うんだ……」

私の眩きに苦笑いを浮かべる渚くん。木造とは違って頑丈そうな作り、綺麗な黒板に綺麗な机と椅子。空調管理もちゃんとしてるらしく、いかに差別化されているのかが分かった。

席の場所はE組と同じ場所らしい。隣の厄介者はまだ来ていないようでどこか安堵した。

「最初は数学かー……初っ端から担当が大野らしいぜ」

「どんな嫌がらせをしてくるか……ね」

先生までもがE組生徒を差別しているのかと悟った。一体何がそこまで差別化されているのだろうか。

「如月さん……大丈夫？」

「大丈夫だけど……何が？」

「顔が堅かったから……」

元からこういう顔だと思うのだけれど。けれどそれは私がこの問題に慣れていないからによる渚くんからの心配なのだろう。

「そっか……お互い頑張ろう」
「そうだね」

鳴り響くのはこつこつ、という指の音とペンを進める音。数学の問題をさらっと見てみる。

確かに1つ一つの難易度が高い。先生が行う小テストとはレベルが違う。問題の途中で目が止まった。

その問題は問い11、それ以降の問題。それは中間テストの範囲外の問題。

解けない事はないけれど……時間をかけそうだ。皆はこの問題に気付いていないのか？辺りのペンを走らせる音は止まらない。

範囲外の問題は一番最後に残そう。手をつけ始めるのは範囲内の基本問題と応用問題。もし時間が足りなければ確実性、だ。

少し時間が経って、ちらほらとその手を止め始める人が出てきた。チャイムが鳴る頃にはもう誰も、ペンを進めるものは殆どいなかった。

それ以降の教科もまた、聞かされていた範囲とは違う問題が後半でてくるようになっていた。

返されてきた答案用紙。数学が82点で1番いい。その次が理科の78点。が、ここからが低く社会72点に国語が67、英語が64点。合計点が363点でE組女子で2位の筈なのに、E組4位なのに。この点数で学年50位にはほど遠く75位という結果だった。

理数系はまだ理解が追い付いていたので出来ていたのだが他が点でダメとも言っていないほどで。

E組4位で50位に到達していないのであればみんなかなり落ちたのではないのか……

思い当たるのはやはり範囲外の問題で。E組の先生らが教え忘れただなんて到底思えなかった。烏丸先生からの報告によるとテスト

2日前に範囲を広げた、とのこと。

「先生の責任です……」

そう暗い雰囲気の中、先生は背中を向けたまま言葉を発した。

……E組から去るのだろうか。クラス全員が50位以内を取れなければ先生は去る。本気でそう言った先生。

こつん、と前の方で音がした。黒板に対先生用のナイフが当り重力でそれは落ちた。

「いいの？顔向け出来なかったら俺が殺しにくんのも見えないよ」

ぱさつと、前の机から1枚の答案用紙を持って行かれた。ちよつと待て、この注目した中でも嫌がらせをしてくるのだろうか。

そのままカルマくんは私の1枚の答案用紙と自分の5枚の答案用紙を教卓に置いた。

「カルマくん！先生は今落ち込んで……！にゅや?!」

6枚の答案用紙は見られる。この際何もせずに知らぬ振りでもしようかと思つて机を見た。……なくなつてる答案用紙は1番いい数学じゃ……？前を見ると挑発気味に先生に向かつて言うカルマくん。

「俺の成績に合わせてあんたが余計な範囲まで教えたからここまで出来たし、あんたの教え方が上手かったから異国人さんもちゃんとここまで結果出せたんじゃないの？ま、俺には及ばないけど」

「異国人さんって……」

「ここから尻尾巻いて逃げちやうの？」

それって結局さあ、殺されるのが恐いだけなんじゃないの？」

最後の1文は妙に挑発気味で。黄色い丸い顔に1つの筋が出来たのを見計らつて便乗して行く生徒。

そして増えて行く筋。

「にゅやーッ!!逃げる訳ありません！期末テストであいつらに倍返しでリベンジです！」

そのリベンジをするのは先生じゃなくて生徒なんだけれどね。

そう思いながらも、このE組の教室に渦巻く笑いと怒る先生の姿らを見守った。

人間の時間 1時間目く6話く

「賞金は山分けで行こう！」

「頑張れ如月！」

本当に殺るのか……そう思った。先生のお気に入りに入りスポット、校舎の近くにある森の開けた場所。そこで椅子に座ってくつろぎながら小テスト作成をしている。その草の影に私とE組生徒はいるのだが。

……ばれているよなあ。先生はどこかそわそわとしている。完全に私たちのことを勘づいているのだろう。だがこの生徒の空気に止めるのもめんどくさいし。1つ深い溜め息が零れた。

しようがないかな。やるしかないか。殺れないんだろうけど。

そう決心して普段通り先生の前に姿を現した。

「おやあ？如月さんどうしました？」

……既に舐めきっている顔。どこか不快感を感じたがあくまで普段通り。

「なんで舐めきった顔なんですか……これ、宿題です」

「おや、もう終わったのですか。提出期限はまだ先ですが」

「早いうちに終わらせておいて損はありませんし」

ふむ、とわざとらしく言葉を発する先生。小テストの紙を置き、マツハのスピードでノートを開き採点をしてくる。宿題の採点が終わり私にノートを渡してきたところで、隠し持っていた先生用ナイフを使って先生の胴体を狙った。

もちろん先生に思いつきりかわされるが、目的はそちらではない。膝（関節がないが恐らくその辺りだろう）に置いてあった小テストは宙に散らばる。散らばっている中で距離を取らせる為にナイフを投げた。後ろからの掩護射撃もある。

「琴音！」

その言葉とともに投げ出されたのは妖刀。投げ出したのは中村さんで事前に持つ場所は鞆だと指定している。不安定にまっすぐ行かなかった妖刀は上に行くがジャンプをしてそれを手にする。

射撃をかわしながらもこちらに意識されているらしい。けれど距

離を取ってしまったえば妖刀ようとうと言えども5mほど遠くでは攻撃は届かない。その為か相も変わらず緑のしましま。

鞘から抜いて宙で縦の向きに妖刀ようとうを振り下ろす。……伊達に妖刀ようとうは普通の刀ではないのだ。

「にゅわっ!?!」

その斬撃覇は空間を移動して、先生に向かった。

が、もちろんかわされ先生の後ろの木に当り、幹に傷が出来ただけのものとなった。

「くっ」

重力のままに落とされるので受け身を取って地面に当る衝撃に備えた。

無傷で終わるが、先生もまた無傷。

「残念でしたねえにゆるふふ」

「くっそー……行けると思ったのに」

ぞろぞろとみんなが草むらから出て来る。起き上がって土ぼこりを叩いた。みんなは悔しそうな顔を浮かべる。

「如月さんの動体視力は素晴らしいですね。ですが貴方は得に警戒しますから」

「でしようね」

「気付いてたのかよ!殺せんせーずりー!」

「でも先生」

「にゅ?」

この様子だと気付いてないようだけれど。辺りに散らばった小テストの紙。もう既に殆ど完成していて、後少しの人数分のテスト作成を行っていたのだろう。

「にゅわーっ!?!小テストの問題用紙がー!?!」

それは掩護射撃で穴だらけになった問題用紙。斬撃覇は空間を移動するものなので問題用紙には当たらないような距離にしたが、気をつけても無駄だったかなと考えた。

「あちやー、これじゃあ次の時間小テスト間に合わないねー殺せんせー」

「この暗殺も無駄じゃなかったな」

私に警戒し過ぎてテストのことをすっかり忘れていたのだろうかと考えた。嬉しそうに満足したようにぞろぞろと校舎内に戻って行く生徒。

「マツハで問題用紙かき集めればよかったのでは……」

「いえ、貴方の事です。から近距離であればどんな攻撃をしかしてくるかは分からない。距離を取れば接近してくるか遠距離攻撃のどちらかです。からねえ」

「……過大評価し過ぎか」と

そもそも私は気付かれないように暗殺するのが得意な戦法で、既に警戒されていれば意味がない。しかもこんな相手だ。

「殺す事で生きることしか私は出来ない、ただのしがない暗殺者です。から」

「……………」

ただただ呟いた言葉に先生は返事もしない。落ちた宿題のノートを持って校舎に戻って行く私を引き止めることもしなかった。

「ということ。小テスト作成が間に合わなかったです……よって宿題を2倍にします！」

「小さえー！」

批判が諸々飛び交う中、そう来たかと思った。

テスト用紙を散蒔いたことよって銃弾がぎりぎりまで見えない状態にと提案したのは私で、延期になる事は薄々分かっていた。みんなも中間テストが終わってすぐにまた小テストというのはうんざりしているのが目に見えた。が、仕返しがあると私の考えになかった。

「暗殺失敗したんだってー？」

ああまたか、と隣からの言葉を聞き流す。

「まあ2回も触手破壊されたんだから警戒されるだろうねー」

「……暗殺を中止する理由でもなかったし」

へー、とわざとらしい相づちをうつ。必要最低限に接せばいい。そう思いながら机の中に教材を取ろうと手を伸ばした。

……湿っぽい感触。中身を覗き込んでみれば4、5匹の蛙。

「それ可愛いっしょー？」

にやにやとした顔をするカルマくん。……わざわざ捕まえてきたのか、蛙を。随分と手にかかる悪戯だと思い、蛙をそつと手で包み込んで立ち上がる。

「にゆる？・如月さんどうしました？」

その言葉に皆がこちらを向く。いえ、と短く言葉を返して窓に歩み寄り立て付けの悪い窓を開けてそつと外に蛙を帰す。一度に全部の蛙を返す事はできないので2回ほど往復して何事もなく席に座った。さて湿ったこのノートはどうしようかと、考える必要があった。

Another side

5時間目が終わって、背伸びをしたところに珍しく如月さんが僕のところに向かってきた。

「どうしたの？」

「……ノート、湿っちゃって。日当りのいいところに置きたいんだけど」

「あ、あたしのところ置きなよ！」

茅野が如月さんの持っていたノートを受け取り日当りのいい机の位置に置いた。でも少し不思議に思う。ここのところ雨が降っていないし、どうやってそんな湿るのだろうか。そう聞くと言いづらそうに、けれど話してくれる。

「……カルマくんが、机の中に蛙入れたみたいで」

確かにさっきの時間の最初、突然立ち上がったと思いきや外に何かを放したように見えた。あれは蛙だったのか。殺せんせーも特に気には留めず授業をそのまま再開させたのですっかり忘れていたが。

「なんでまたカルマくんが……」

確かに彼は悪戯好きだけれど女子にするようなことはなかったし、以前殺せんせーに手入れされたことでだいぶ落ち着いたと思っただけだ。

「如月ちゃんに構って欲しかったり？」

楽しそうに話す茅野の言葉に如月さんは表情を変えない。渴いたような笑いの声を発するだけで。

「えっと、じゃあノートお願いします」

「うん！多分放課後には渴くから！」

深々とお辞儀をして如月さんは席に戻って行く。その様子を見届けてると、椅子を引いたその時何かに気付いたようでそこにあつた何かを取る。

あれ、ブーブークッションじゃあ……投げつけるようにブーブークッションをカルマくんの席に放る。挑発気味のカルマくんの表情に如月さんは無視する事を決め込んだようで気にも留めない。

しよっちゆうあんなことをしてるのかな……。

「ねえカルマくん」

「あれー？渚くんもサボり？」

掃除の時間。時々カルマくんはサボりに行く事を知っていてどこでサボっているのかも知っていた。

草むらで寝転がるカルマくんは顔を動かして僕の方を見る。

「如月さんになんてちよっかい出すのか聞いていい？」

「えー？気に入らないからだよ」

「気に入らないって……」

んー、と唸り始めるカルマくん。数秒して目を瞑るのでいつ寝てもおかしくないよなあと思いつつ待っていると、突拍子な言葉が出てきた。

「人間、やってないんだよねー」

「……え？」

「そろそろ掃除終わるよ、戻ろう」

勝手に会話を切り上げられ、そのままカルマくんは僕の言葉も聞か

ずそのまま校舎へ行ってしまう。

人間をやっていない、だから気に入らない？人間をやっていないと
いうことはどういうことなんだろう。

この後の放課後にその意図は分かった。

人間の時間 2時間目〜7話〜

Another side

「人間をやっていないと、カルマくんが言ったのですか？」

「うん、殺せんせーなら意味が分かるかなって」

何となく本人に聞く気もしなかった。もし僕が人間をやっていないと言われても困ると思う。

ぬう、と唸る殺せんせー。思い当たる節でもあるのかな。

「そうですね、確かに彼女は人間をやれていません」

「……でもそれってどういうこと」

「誤解しないでほしいのは、如月さんは人間として生きる術を知らないのです」

突如として真剣な先生の声。人間として生きる術を知らない。抽象的な言葉ばかりで如月さんの何が悪いのか分からなくて

「……じゃあ殺せんせーが教えればいいじゃないか」

「それでは彼女は先生の言う通りの状態になってしまいますねえ

渚くん、みんな教えて上げて下さい」

憎らしいいつもの殺せんせーの表情。顔を見上げて僕らがどうすればいいか教えてはくれない。

僕は……殺せんせーに相談したことは合っていたことなのだろうか、そう悩ませた。

とりあえず放課後、如月さんの様子を遠くから見てみる事にした。

近々ある修学旅行に向けての話で盛り上がっているが、如月さんは決してその中に入ろうとせず1人でノートを広げていた。

「渚、どうしたの？……如月ちゃん？」

「うん……1人でいるなって」

よくよく思い返せば如月さん、仲がいい人いたっけ？放課後誰かと話していたっけ？

記憶にあるのは勉強している姿と話しかけられた時無表情に相づ

ちをうつ姿。

……無表情。

1つ思いついたことをそのまま実行に移す。如月さんの机の前に行くとな彼女は僕に気がついた。

「……………どうしたの？渚くん」

「如月さん、笑ってみて」

「な、渚？」

A n o t h e r s i d e f i n

「如月さん笑ってみて」

突然渚くんが話しかけてこられて、その言葉がこれだった。思わず、え、と言葉が漏れる。

突然の行動に、言葉に、皆が皆注目している。一体なんだというのだ。

「なんで」

「いいから」

笑えばいいの、と言葉を続けようとすれば言葉を遮られた。笑う、笑うって？

真剣な表情を向けられ、とりあえず笑ってみる事にした。

「……………」

「……………」

「……………これでいい？」

「笑えてないよ！」

渚くんの大きな声。初めての大きな声におまけに目の前でそう言ったからびつくりさせられる。

「どうしたのさ渚くん」

「なんかあったのか？」

ぞろぞろと生徒が集まり始める。ああ、嫌だ。隣をちらと見れば笑みを浮かべるカルマくん。その向こうは扉^{てくら}。立ち上がろうとすると「あれえ？どこに行くの如月さん？」

……もう、どうにでもなつてしまえと自暴自棄に椅子に座り込んだ。

「如月さん、笑ってこととかある？」

「……さあ」

「じゃああたしの真似してみてよ！」

茅野さんはいーつ、と口に出して笑う。未だにみんなの意図が分からないがやらねばいけないようで。茅野さんと同じように

「二ー」

と笑ってみせる。すると周りの人はどこか啞然とした表情で私を見てくる。

「本気なの!?如月さん！」

「真顔のままだよ!？」

真顔のまま?・私は普通にやっているのだが、そんなに笑えていないのだろうか。

「如月さん、もしかして自分が今まで表情が変わってないっていうことに気付いてない……?」

「……表情、出せてない？」

「ない」

みんながきつぱりとして言い出す。そうか、自分真顔のままなのか。

でもだからと言って何か困る訳でもない。言葉を交わせれば充分じゃないか。

「そもそも私が誰かという意味も価値もないと思う」

「それ本気で言ってるの？」

「うん」

私の呟いた言葉に突っかかってきたのは今までちよつかいなどをしてきたカルマくん。その彼がどこか怒り気味に言ってくる。

なんで怒るのか理解出来ない。別にカルマくんには関係ないことだ。即答した言葉に更に怒りを募らせる彼を抑える渚くん。

「まあまあ!・とりあえず如月さんを笑わせてみようよ！」

「そうだな、如月全然話さないからどういう性格とか好みも分からない

いし」

「じゃあまず、好きな食べ物はある？」

聞いてきたのは原さん。穏やかな雰囲気です。聞いて来るので先ほどの空気を打ち込まず話せそう。

喋ろうと思ってる。

「……こっちと向こうの食べ物違うよ」

こちらで初めて食べたものは向こうの世界とは見た事もない食材で、そこで自分は確かに遠い世界へ来てしまったのだと実感を覚えたのだ。

マジで？と聞いて来る生徒。確かマジで、という意味は本当？という意味だったような気がするのでマジだよ、と返す。

「好みの味とかないの？嫌いな味とか」

「……酸っぱいものが好きかな。嫌いな味は甘ったるいもの」

よし、と皆どこか満足そう。いつの間にか岡野さんが黒板に「好きなもの 酸っぱいもの 嫌いなもの 甘いもの」と書いている。

……それは、なんの役に立つのだろう。

倉橋さんが突然手を挙げて言った。

「誕生日はいっつ？気になっててさ！」

「誕生日……ない」

「ない？」

向こうの世界に誕生日というものが無いわけじゃない。ただ私は自分の誕生日を知らないし、祝われることもない家柄だったのだ。そう説明するとどこか空気が悪くなったように感じた。

わざわざ「誕生日 不明」って書かなくてもいいのに。

「趣味は？」

「ない」

「特技！」

「特になし」

「好きな季節とか！」

「……夏、かな」

「なんで!?!」

弾丸の質問に即答して返してきたので思い耽ればどこか真剣そうな顔でみんなが聞いて来る。

なんで、という言葉に思い返すとこれと言った理由がなかった。決して楽しい思い出もなかったので

「なんとなく」

そう返した。じゃあ、とどンドン出てきそうな質問にいい加減ストップをかけた。

「ごめん、これ意味ある?」

その言葉に皆見合わせる。困ったような表情。みんなの気持ちを代弁して渚くんが喋った。

「好きなものを喋れば自然と笑顔になるものだから……」

「もうこうなったらアレね……」

どこか緊迫したような表情の不破さん。女子をかき集めてこそこそ話を始める。次は一体なんなんだろうと思えば中村さんと岡野さんが突然私の腕を抵抗出来ないように、脇を閉められないような体制。不破さんが突然背後に立ち脇でくすぐり始めた。

「……………」

「き、効かない!」

「なんで!?!」

岡島くんがそう叫ぶと女子全員はどこか軽蔑したような目を向ける。逆に何故、なんでと叫んだのかが知りたいのだけれど。

その後も色々続いたが、結局最後には烏丸先生が来て最終下校時間だと伝えられ解散させられた。

疲れた……とベッドにダイブする。今日は特に勉強もせず、ずっとみんなに囲まれていた気がする。何故みんなああまでしてやり続けるのだろうか。

ふと思いついたように立ち上がって洗面所に向かう。鏡の前で――、と笑ってみるが確かにみんなと違って笑えてはいない。

何をしてるんだ

別に私が笑えなくなつてなんの問題もない。夕食を食べる気もせずそのまま寝間着に着替え疲労が溜まる中、布団に入った。

そもそもなんで人は笑うのだろうか。笑うことも泣くことも怒ることさえ、必要なものなのだろうか。今まで生きてきた中で別には必要として来なかった。人間って変だ。

そう思つたけどこの場合私に変なのだろう。私は人間ではないのかな。それでもいいか。

その晩、私は夏の夢を見た。

眠い……昨日考え事をしたせいなのかお昼を過ぎても眠さは残っていた。修学旅行に向けての授業だから説明もあるだろうしちゃんと起きていなければならないのだけれど。

欲には勝てず、いつの間にか机を俯せにして私は寝てしまつてた。

「如月さん、起きて」

こそつとそう起こしてくれたのは渚くん。私はまた人という人に囲まれてた。

「大丈夫ですか……？」

「あ……うん……眠いだけ」

前の席の奥田さん。特にみんなと喋っているところも見ないが、決して喋らないというわけではないんだと思う。

立つてここに集まっているのは渚くんと茅野さん、杉野くんに神崎さん。奥田さんはこちらを向いて座っている。

「随分とぐっすりだったねえ」

そう隣の席から聞こえた。手に持つてるのは携帯。画面には私の寝ている様子が写されていた。携帯のカメラ機能……か。

ところでこれは何の集まりなのだろう。違う場所ではまた同じくらいの人数が集まって何か話し合つてるようにも思える。

「修学旅行の班、如月さんが余つてたから俺が入れてあげたんだよー」
にやにやとそう言ってくるカルマくん。班……班行動でもちよっ

かきを出す気なのだろうか。

けれどももう決まってしまうたのはしようがないのだろう。

「如月ちゃんどうする？違う班今からでも行けるけど……」

「決まっちゃったならしようがないよ。大丈夫」

茅野さんは私とカルマくんが一緒になったことを心配しているの
だろう。別に、気にしなければいい。

「カルマー旅先でケンカ売って問題になったりしないよな？」

「へーきへーき」

そう言つてどこからか取り出した1枚の写真。中央にカルマくん、
ぼこぼこにされたのであろう制服を着た女子と男子が身分証を持っ
てカメラ方向を見ていた。……これは、どうなのか。

立ち上がつてこそつとカルマくんに一言忠告する。

「勇気があるのと無謀なのは違う……いつか痛い目に遭うよ」

「如月ちゃん？」

「うん？どうしたの」

「……へえ」

こんな中でも先生に向けての暗殺（と何故か私を笑わせる）計画が
着々と進められていた。

修学旅行の時間 1時間目〜8話〜

初めて駅と電車というものを使う……。初めて使う交通手段に、不安を感じ早い時間から出発したが集合場所には問題なく予定より早い時間に到着してしまった。集合場所の目印となっているホームから出た駅の室内にある噴水時計の傍。たくさんいる人の通りの邪魔にならない場所に荷物を置いてその場で待つ事にした。

荷物はボストンバッグ、という手に持つ鞆を使った。中に入ってるのは下着と服の予備、生活用品くらい。手持ちに持つ鞆はいつもの学生鞆らしい。本当はもしもの時に妖刀ようとうを持って行きたかったが流石にやめてくれ、と烏丸先生に言われた。

私が使っている部屋の鍵を持っているのは私と烏丸先生だけなので問題ないと言われたのでそのまま置いてきている。一泊2日の旅だ。妖力ようりょくの発散はしなくても多分大丈夫だろう……。

妖力ようりょくの扱いは正直に言うと同倒なのだ。魔力と違って自然から妖力ようりょくを得る事はできない。体内で力の管理をする。全て感覚的なものだけれど。そしてもう一つの難点が体内の妖力ようりょくを空っぽにしてもいけないし、自分の許容できる妖力ようりょく以上の力を持つ事はできない。

その妖力ようりょくの発散の仕方、それは妖刀ようとうを使う事だ。妖刀ようとうを使った攻撃、それは所持者の妖力ようりょくを衝撃という力に変換して攻撃の威力を出す。普通の斬撃攻撃でも妖力ようりょくは使うし、以前先生の暗殺時に使った衝撃波を出す特殊な技にも多くの妖力ようりょくを使う。一応ただ妖力ようりょくを消費するだけなら物体に妖力ようりょくを流し込めば消費される。ただ破壊の可能性があるので普段は妖刀ようとうに流し込んでいる。

「あれ早いな如月」

「よっ！」

いつもより大きな鞆を持ち、いつもの制服を着たE組の男子生徒二人。1人はクラス委員の磯貝くんと、磯貝くんと仲のいい前原くん。駆け寄ってきた2人に無言で会釈をする。

「まだ先生たち来てないのか」

「見た限りは見当たらない」

磯貝くんは手首にしている時計を見る。噴水の天辺にしている時計を見ると待ち合わせ時間の30分前くらいだろうか。こんな早くに来るつもりもなかったのだけれど。

「如月って学校来る時も早いよな。今日は特別早いけど」

「電車を初めて使うから……迷う可能性も見越して早めに家を出たんだけどそんな心配いらなかったと思った」

「?誰かと一緒に行けばよかつたんじゃないか?」

「……そっかその方法があつた」

苦笑いを浮かべる2人。誰かに案内してもらおう、という考えはちつともなかった。けれど私自身誰かというよりは1人であることが好きだから考えがあつてもやらなかつたんだろうなと考え直す。

「如月は迷い易いのか?」

「うーん……前の世界では目的もなく街が近くにあればそこに行くつていう感じだったし」

「旅してたのか!?!」

時々前原くんはどこか私のいた世界に夢見がちな気もする。暗殺者が同じ場所にいたら狙われるよ、とだけ言ってみるとどこか納得したような素振り。そういうえば……向こうでは私の存在ってどうなっているのだろうか?向こうの世界で生活してた時は特に時間を気にしないです生きてきたけれどこっちに来てからどれくらい時間が経っているのだろうか。

まあ向こうじゃ私を気にする人もいないか。考える必要もないと、そう思った。

会話の受け答えを3人でしていると来たのは烏丸先生。そこから続々とE組生徒が集まってきた。どうやら他の組は違うところで待機してゐらしく、生徒が全員揃つたところでホームに移動。長距離専用の電車が来て、それに乗って目的地の京都に向かうらしい。

「如月さん、京都楽しみ?」

「うーん……基本こっちの世界と向こうの世界じゃ全然建物が違うから、どうだろう?」

穏やかに話しかけてきたのは神崎さん。同じ班だった、はず。彼女は大人しい性格で、その性格と容姿に男子がちやほやするよう。

「暗殺、成功するといいですね……！」

「殺せたらいいね」

奥田さんと茅野さんも会話に入ってきて来る。そうか、向こうに行っても暗殺するんだったつけ。どうやらプロの狙撃暗殺者を呼んでるらしく、班によって一定時間先生と観光し、先生に油断をさせてそこで狙撃者が暗殺する。そういう旅行になると聞いた。私たちの班が決行する時間は4つある班の一番最後。事前にどのコースを行くか、どこで決行するかを余裕持って決められる時間帯だ。

「うわービッチ先生また凄い格好……」

格好に決まりがあるのか、私には分からないが明らかにイリーナ先生の格好は目立つ。他のクラスも特別車両に乗り込んでいくのだが、イリーナ先生の派手で煌びやかな格好に思わず足を止める人が多い。

あ、烏丸先生怒ってる……烏丸先生の覇気に圧されるイリーナ先生の様子にE組の生徒は呆れていた。

「如月ちゃん、初めての新幹線なんだよね？」

「うん……向こうに魔法で動く列車はあったけど……凄い」

前の席から私のいる後ろの席を覗き込んで喋る茅野さん。私は窓を覗き込んで新幹線の早さと快適さを堪能していた。列車は一度だけ乗った事あったけど遅いし揺れるしうるさいし暑いしで、もう二度と乗るかとその時思ったのだ。

駅に行くまでも電車に乗ったけど人は多くて立つしかないし、けど空調機が効いてたし。それと同じくらいかと思えば新幹線は全然違った。全く揺れないし、殆ど音もしない。

「先生のマツハよりいいね……」

「待って下さい!!先生の方が新幹線よりも遥かに速いんですよ!!」

私の言葉にすぐさま反応してきた先生。でも先生のマツハこんな風に役に立っているのかな、とも思えた。

「如月もババ抜きしようぜ」

杉田くんのお誘い。6人の席でカードゲームをしてるようで、けれど私の班は7人。6人席の後ろに1人で座っている自分へのお誘いだった。ばばぬき、というカードゲームはよく分からなくて私邪魔なんじゃないのかも思ったがみんなが急かすようにおいで、と言ってるので一戦だけと決めてルールを聞いた。

「揃ったからはい、最後の1枚どうぞ」

「如月さん速い……」

通路に立って、ババ抜きというゲームをやってみた。同じ数字のカードを揃えれば手持ちが減って行く。自分の手持ちカードを0にすれば勝ちというゲームで、ジョーカーというカードだけは揃わないので最後にそれが残った人がおしまい。左隣にいる杉野くん到最后の1枚のジョーカーを渡して一番最初に終えた。

つまりこのゲームは誰がどのカードを持っているか、どのカードが回るかを見極めるゲームで、あつという間に攻略法を見つけて終わってしまった。一戦だけ、と決めていたのでおやすみなさいと伝えて元の席に戻る。

今日は早くに出発したのでいつもより早めに起きた。そのせいで新幹線で時間を費やしているうちにどんどん眠たくなっていったのだ。窓に頭を預けてそのままぼーっとする。……この快適さならすぐに眠れそうだ。

「隣失礼するねー」

そんな言葉とは裏腹に当たり前のように隣の席に座って来るカルマくん。一体なんなんだと思わず思ってしまう。

「……ゲームしてたんじゃないの？」

「俺も終わったしー？」

そう言いながら彼はブレザーを脱ぎ、それを私のところに置く。……なんで空いてる席に置かないのか。それを言うのも面倒に思ってしまう。別に彼のブレザーに何か小細工を仕掛けてあるということではなさそうで、まあいつものちよっかいよりはマシかなと思っそのまま放置する。

カルマくんも寝に来たようで、脱いだ後はすぐに寝る体制になっていて大人しければ問題もない。そう思ってせめてブレザーがくしやくしやに跡がつかないように綺麗にしてから眠りについた。

修学旅行の時間 2時間目〜9話〜

辺りを見回すと古い規則的に並んだ町並。ここは祇園という京都の町だという。着物、と呼ばれる随分華やかな服を来ている人や、違う国、同じ国から来た旅行者、地元の人など歩いている人は見かけが私と同じ服を着た人は見かけない。

そう、つまり

「……はぐれた」

携帯に予め入れておいた地図のデータを見る。神崎さんの候補である、早々人が入って行かない小さな路地に行くと言っていたのでこの大きな通りではないのだろう。携帯の電源を落としてポケットに入れ、溜め息を吐く。……風潰しに探さなければ。

先ほどまで人通りが多く、それに流されてしまい人が減って気付いたときには1人になっていた。会話が賑やかになつていたので私のはぐれたことに多分気付いていないと思う。

小さな暗い路地を見つけたのでそのまま入って行く。さつさと見つかればいいのだけど、最悪時間に間に合わなかったら携帯で連絡を入れなければ。携帯に入っている連絡先はカルマちゃんと烏丸先生しかないから気はあまり進まないけれどしようがないと、仕方ない。自分が気をつけていれば何もなかったのだ。

小さな路地の奥から人の声が微かに聞こえた。聞き慣れた声、恐らく班のメンバーだろう。よかった、合流出来る。そう安堵して声の在処を探していると気がつく。声が、班のメンバーより多い？違和感に不安を感じ駆け足で声のする方向に向かう。

バキイツと軽々しい渚くんが吹っ飛ばされる音。男子は皆倒れ、女子は知らない輩に取り押さえられてる。私たちよりも凶体が随分と大きい柄の悪い制服を着た恐らく違う学校の男子。

「ッ……ッ!!」

茅野さんが私に気付いたらしく、口を抑えられているが助けを求めするために必死になっている。その様子に柄の悪い人たちも気付き、最

初は舌打ちをしたがどこかにんまりと気色の悪い笑みを浮かべた。

「お友達い？随分と美人だねえ、こいつもさらっちまえ」

1人の男が大人しくしろよ？と近づいて来る。渚くんを殴った奴か。殺気を出すとそいつは怯み、怯んだその隙に懐に近づく。相手の急所、みぞおちを狙って膝蹴りを食らわせると男は受け身も取れず倒れた。

凶体が大きくて力だけが取り柄の奴らか。数は1、2……倒れているのが2人、神崎さんと茅野さんを抑えているのが2人、立ち向かう余裕があるのが2人。倒されたうちの1人は班の誰か……多分喧嘩っ早いカルマくんがやったのだろう。けれどそのカルマくんも倒れている。……忠告したのになあと思う。

「おい、抵抗するのか？」

「……みんなを離してくれませんか。私たちの先生が黙ってませんよ」「随分と威勢いいがこいつらがどうなってもいいのかあ？」

1人の……恐らくリーダー格だろう男は、手に持ったパイプ棒を一番近くにいた倒れているカルマくんに突きつける。思わず戸惑う。体重をかけてしまえばいつでも突き刺せる状態だったのだ。戸惑ったことに察した男はやれ、と合図を出した。後ろから攻撃が来るけれど抵抗が出来ない、違う男が持っていたパイプ棒で後ろから殴られめのまえがまっくらになった。

……だよ……もうじ……場所……らない……

オレら……なりや……だよ

頭が痛い。

人の声で意識が黒から微弱の光を感じ戻される。捕われたことを思い出し、悟られないように僅かに瞼を開ける。横向きに倒された自分の目に映る。目が瞑っているように人から見られるくらいの僅かに開いた目に見えたのは手を縛られた茅野さんと神崎さん。先ほどより仲間が増えた柄の悪い男らの姿。

段々と意識がハッキリしてきた。1人淡々と気色悪い笑みを浮か

べながら喋るリーダー格の男。……そういえば、この場にもあの時も奥田さんはいなかった。気が弱い性格から考えるに隠れて無事であるのだろう。きつとみんなが助けにくるだろう。それまで無事に……

茅野さんがぼそつと呟いた言葉が聞き取れた。さいてーという言葉に淡々と喋っていた男の表情は変わる。……まずい。

咄嗟に動いた体は茅野さんの前に立つ。叩かれた手を覚悟して、手に寄る防御は出来なかったが体がよろめくことはなかった。

「如月ちゃん!？」

反射的に私の睨みに後ずさりをした男。2人を自分の背中に隠すように立つ。茅野さんの言葉に手を動かして大丈夫だ、とサインをする。腕は縛られていて、妖力ようりょくで破壊しようと思っただがテープか何かで縛られている場所は手首より上の位置。随分と頑丈に縛っているのか。すぐにこれを外す事は出来なさそう。

で、あれば。今出来る事は皆が来るまでに “2人に触れさせない” ようにすること、だ。

「……はっ、大人しくしてれば傷付けるともりはなかったんだけどよお……お前から台無しにしてやるよっ!」

その言葉に3人ほど一気に向かって来る。ああ、一度気絶させられたからだろうか。頭痛はするものの頭が冴え渡っていた。

手が使えないので向かって来る3人を足技で近づけさせないように、かといって傷付けすぎないように飛ばす。手が使えないのなら気絶させることは出来ない。けれど時間稼ぎには充分だ。

私は気付かれないように暗殺することが特技だけれども、昔は用心棒もしていた。暗殺業として裏から依頼が来るようになってからはもう用心棒することも出来ず、その経験も忘れたと思っただけけれど体はちゃんと覚えているようだ。

向かって来る男らを遠ざけるように飛ばして、それを何回か繰り返すと外からの音に気付く。

「観念しな、うちの撮影スタッフがご到着だ」

……?その言葉に理解し不安を感じながらもなんだか物騒な音が

僅かに聞こえた。それに気付いていないようで。本当にあいつらの仲間が増えるのだろうか？流石にこの場にいる奴らをあしらうのがぎりぎり、これ以上増えると私も危ないのだが。

扉が開き、出て来たのは確かに柄の悪い男。……だけれど明らかに男らは動揺する。それはそうだろう。ぼこぼこにされた状態の男が出て来たのだ。そいつは地面に倒れ後ろから出て来たのは、ああなんだ。もう着いたのか。

先頭はカルマくん。その後ろから班のメンバー全員が出て来る。

突然渚くんは何かを朗読し始める。あの分厚い大きな本は……先生の作った辞書並みの修学旅行について書かれた栞。渚くんが読んでいるのは班員が拉致された場合の対処法の項目。あの分厚さは何が書いてあるのかも思ったが、なるほどそういうことが書かれているのか。それでみんなが助けにくるのも早かったわけだ。

……そうだなあ、渚くんなら持っていそうだな。流石に自分は旅にあの重い本を持って行く気にはなれなかつたので家に置いて来た。

もうみんなが来たから大丈夫だろうと2人の近くに座り込む。自分は頭が痛いのだ、後は任せた。

その後柄の悪い男が追加されると言っておきながら追加されたのは真面目っぽい学生に先生が手入れされたぼろぼろの男たち。黒い布を顔面隠すように現れた先生によって、そして先生の作った鈍器しおりで男たちは倒された。

「いやあ、よかつた。如月さんが全員倒さなくて。処刑したかつたんだよねー俺」

「……懲りないね」

何の事？と素っ慌けるカルマくんは縛られた腕のテープを解く。痛い目に遭っておきながらまだ観念してないようで。深い溜め息が零れる。

テープが解かれ立ち上がろうとするとカルマくんは頭を抑えられる。一体なんなんだ、まだ頭が痛いのに。丁度パイプ棒で殴られた場

所に触れられ、痛みで声が漏れる。

「殴られたのはここだけ？」

「……分かってるなら触らないでよ、痛いんだから」

「たんこぶが出来てるだけ。大丈夫そうだね」

聞いているのか、聞いてないな。諦めたようにされるがままになると腕を掴まれ持ち上げられる。そうして立ち上がる。

「行くよ」

「……なんなんだ」

立ち上がらせておいてさっさと建物から出て行く。ちよつかいが来ると思えば来ないし、今日されたと言えば新幹線のものくらいだし。

一応忠告は効いたのだろうかと自己解決した。

修学旅行の時間 3 時間目〜10 話〜

旅館の中を探検して、外に出てみようかと階段を降りて行くと目の前をマツハで移動する恐らく先生。先生の来た方向からは男子が大量で追いかけて来る。

「如月！殺せんせーどっち行つた!？」

「え……階段のほうは通っていないから向こうだと思っけど」

「サンキュー！」

先頭を切っていく前原くんはナイフを構えて凄惨な表情で私が指を指した方向に向かう。男子の皆、ナイフやら銃を持って前原くんについていく。……暗殺なんだろうけど、何があつたのだろうか。しばらく動かず耳で様子を窺うと明らかに、男子の人数だけではないほどの大きな騒音。……本当に一体何をしたのか、先生は。

「どこ行つた!？」

「探して吐かせろ！」

男女の声が古い旅館に響く。……E組以外はこの旅館を利用していないようでそれはそれでよかったなと思う。

とりあえず、そつとしておこう。そう思つて旅館の軋む階段を降りて行つた。

外の夜はやっぱり涼しい。探検する前はここのお風呂に入ったのだが、旅館の中はあまり空調も効いた感じがせず、涼む場所を探していた。古い旅館で、他のクラスの人はホテルだと言つていたが古い旅館の方がいいと私から思えた。

風情のある町並に灯りが灯つていて、とても綺麗だった。

「なーにしてんの」

「……涼んでるだけ」

後ろからの声。もう確認せずとも誰だか分かる。

今度はもうなんなのだろうか。出来ればもう、疲れたくないから涼んだら寝たいのだけけれど。

「まだ髪濡れてるけど」

「……だから？」

首の後ろの短い髪に触れて来る。と思つたらその次に首に何かをかけられる。……タオル？若干それは湿っているようで、使用済みなのかと思わせた。

「いい加減さ、独りでいるのやめたら？誰も助けようがないと思うけど」

真剣な声に怒り混じりの感情。その言葉を言った顔はどんな顔なのだろうか。ゆっくり首だけを動かして見る。初めて見た真剣な眼差しだった。

「自分ではさー孤独を意識してるんだろうけど、孤独にしてるのは如月さん自身じゃないの？」

「……それは」

「否定ばかりしても意味ないと思うけど？」

放つ言葉に言い返そうとするが言い返せない。私が何を言おうか読んでいるのだろうか。それと同時に

「なんで私にそう言ってくるの？」

時々執拗な行動を私に取ってくるカルマくんがよく分からない。別に放っておけばいい話だろう。私がどう生きるのも、彼がそれを見ているのも。

少し言葉にするのを戸惑ったのか、数秒して

「嫌いだから」

そう言った。嫌いだから、言うものなのか。その言葉の意味が分からなくて気にしないことにした。

「……それで、私にどうしてほしいの」

溜め息まじりの言葉。何かを忠告して来て、その理由が嫌いだからというのであれば私に改善を求めているということだろう。

けれどその言葉に呆れたように

「それくらい自分で見つけたら」

流星にその言葉にカチンと頭に来た。この人は一体本当になんだというのだ。当の本人は私のイライラに気付いていないのだろうか。

「……勝手すぎる」

「ん？」

「ちよつかいしてきて、私のことを嫌いという理由で否定して。

なのに改善方法を聞けば、自分で見つけたらってばかじゃないの！」

一気に言葉を続けたせいかわ、喋り終えて大きく息を吐いた。自分で思っていたより声は出て、辺りがしん、と静寂に包まれたような気分になされた。

と、静寂が流れてカルマくんの笑い声が唐突に吹き出た。

声をあげて笑う空気と様子に呆然とするしかなかった。

「なーんだ、ちゃんと怒れるじゃん」

「……怒ってた？」

気付いてなかったの？と笑うカルマくん。なんだろう、ちゃんとこの言葉は。

「ちゃんとしかめっ面して。

無表情の言葉だけじゃ本当にそう思っているのか分からない。みんなには伝わるんだろうけど俺はガキだし？」

無表情の言葉だけじゃ……。つまりカルマくんは疑心暗鬼になっていたということ？その割にはどこかあざ笑うかのような最後の言葉。

「……………」

「ちゃんと嫌なことは嫌って言わないと俺分からなくてまた意地悪するかもね。人に何も言わず気付いてもらうまで待つなんて虚しいでしょ？」

虚しい。自分は虚しかったのか。今までちよつかいをし続けて来たのも私が嫌がらなかったから。放っておけばなんとかなると思っていたから、ということなのか。考え込む私の肩にかかったタオルを取り、背を向けて旅館へ入ろうとしていくカルマくん。

「風邪引きたいの？引きたくなければ戻ったら？」

いつの間にかすっかりと火照っていた体は普段通りに戻っていた。浴衣を着ているから別に熱は籠らないし、あつという間に涼むのか。旅館の中に戻ろうとするとカルマくんはその場に立って上を向いて

いた。

……上、というより旅館の2階窓辺り。そこに何かノートとペンを持った先生がこちらを向いてにやにやと笑っていた。

「……あのタコツ」

「え」

カルマくんも浴衣のはずなのに、駆け足で2階に向かって行った。懐からナイフを取り出したのはきつと気のせいではないのだろう。先生もまた駆けていくカルマくんを見てマツハで消えた。

……何を書き留めていたのだろうか。なんだか今日は一日慌ただしかったような気がする。

疲労が溜まってる。体は確かに疲労を感じていたがさきほどの話のおかげか精神的には少しすつきりしていた。

流石にみんな大部屋に集まっているよね。今日は早く寝てしまおう。そう思つて2階へと歩いた。

「久しぶりイ！元氣そうねエ！」

私は……そうだ。寝ていた。そしてこの懐かしい気がする甲高い特徴的な声は神様なのだろう。

相変わらず黒い空間。けれど前とは違って赤い光が蛍のように、いや夜の京都の仄かな光のようだった。相変わらず神様の姿は見当たらない。

「探してもオアンタには見つからないわよオ！」

きやはははという相変わらず高く響く笑い声。空間が空間であつて反響していく。反響して行くせに場所が分からない。……反響し過ぎて場所が分からないのか。

「……あなたが現れたって事は」

帰る情報だろうか。前はすぐに消えてしまったので流石に時間が経つて現れるという事は何か分かつたのだろう。

「残念でしたアー！暇だったから見に来てただけエ」

……さいですか。神様は意外と暇なようだ。私を帰すことを無視して。

暇だったから私を見に来たのか。だとすれば何か話すことはできるはずだ。そう思っただけで思いついた言葉をそのまま言ってみる。

「……これは夢？」

「ブッブー。不正解イ！」

これは……時々カルマくんからちよつかいを受ける時よりも不快感を感じる。何か私が言う前に

「不機嫌ねエ。ちゃんと教えるわよオ！」

「ここは紙つぺらでいう厚みの場所オ！」

「……はい？」

不機嫌を察してくれたものの、説明がさっぱり分からない。紙の厚み？じゃあここは紙の世界とでも言うのだろうか。訳の分からない説明に混乱せざるを得なかった。

「まだ説明は終わってないわよオ！」

世界って言うのはア表と裏があるの！まあその2つだけじゃないんだけどオ。アンタの元いた世界が表、今生活している世界が裏だとして、ここはその間ってわけエ！」

「……狭間ってこと？」

物分かりがいいと言っただけでご機嫌になる神様。こんなにも扱い易いのか。それにしてもなぜまた世界を紙で表すのか、私には分からなかった。

「まあ狭間って言っても距離は裏に近いんだけどねエ。狭間は理ことわりという力によって出来る世界イ！要は神様の世界よオ！」

きやはははと響く言葉はどんどんと遠ざかっていく。

そんな感じがした。

所有者の時間く11話

修学旅行から帰って来ての通常授業が始まる。いつも通り日の昇っていない時間帯に起きてジョギングし、学校に向かう。

修学旅行にてカルマくん色々注意された。そういう意味ではないつとは違う意味で迎えなければいけないのだ。どう学校で過ごしていけばいいのだろうか。どう接していけばいいのだろうか。いつも通りを変えるにはどうすればいいのか、悩んでとりあえずいつも通り学校へ行った。

のだけれど

「……………」

おんぼろの木造の校舎にあるいつもの教室。私の席の隣に正体不明の黒く四角い何かがあった。……………なんだこれ。

もしかして、と思って携帯を出し電源をつけるとメール受信箱。1通のメールを開く。

そのメールは烏丸先生からだった。

それは今日、転校生が来るということ。そしてその転校生の外見に驚くそうだ。

……………このことなのだろうか。本当に？流石に時間的には先生らは来ていないし、クラスメイトに確認は出来ない。

つまり人じゃない？いや人じゃないとして、一体なんなんだ、これは。

席にも座れずにその前にそのまま突っ立って考えているとガラツと教室の引き戸を開く音。

「おはよう」

「おはよー！」

片岡さんと倉橋さん。まず最初に目に入ったのが私だったようだが、私に駆け寄る途中で表情が変わる。視線は先ほど私が見ていたそれに。

「……………なにこれ」

「私も聞きたい」

答えてくれる人は存在しない。そうして数秒後男子5名が入って来る。まあ私たちが見ている視線に釘付けで。当たり前前だけど。

その物に圧倒されていると突然、小さい画面と思われる場所が起動した。それはピンク色の髪に同じ制服を着ている可愛い女の子。若干それは画面の問題上青掛かっている。どこからか、その物から電子的な声が聞こえた。

「おはようございます。今日から転校してきました、自律思考固定砲台と申します。宜敷くお願いします」

返事を待たずに画面はまた黒へと戻った。……転校生は、機械？ 在校生に、機械なんてありえるのかなとふとみんなを伺えば衝撃を受けたような表情。……どうやら普通では、ないらしい。

どうやら彼女は機械と言ってもただの機械ではないようで、ちゃんと固定砲台という武器であることが今日一日の学校生活によって身に染みた。

授業中、あれの横の側面からたくさんの銃を出す。そして先生を暗殺する。何度もそれを行い、分析していく。先生というモンスターは授業中絶対教室から出て行かない。そこを狙ってどんどん自ら分析し、最終的に暗殺するということ。

まあそれだけならいいのだが、発砲した弾は殆ど乱射。私は位置的に問題はないが、みんなに当たるし授業中はずっとその暗殺で全く授業が進まない。

そして乱射した弾の後始末は私たちということだ

「や、やっと終わったあ……」

「……これ、何個くらいあるんだろう」

先生はその弾に触れない。自立思考固定砲台は暗殺以外何もしないということだ、生徒が授業と授業の合間の少ない時間で全て片付け。骨が折れる作業なのだ。もうこれで6時間目を迎えたという頃にはみんなうんざりと疲労の溜まった表情になっていた。

ちゃんとした暗殺者としての生徒、それでも機械。先生の触手を破壊したところで生徒たちの不満は消えずに翌日は拘束するという行

動に出た……。

「暗殺者が如月みてえな奴だったらマシンなだけだよ」

ガムテープを自立思考固定砲台に投げつけた寺坂くんはそう言った。正直寺坂くんには嫌われてると思っていたので避けていたのだが、マシンと評価される。マシン……この場合はいい評価で合ってるよね？そもそも私はあまり暗殺に気は進まないのだけれど、いつかは殺らなきゃいけないのかと考えさせられる。

接触、しなければ……そうとも思えたけどそうすればこのクラスに私はいないのか。

そのまた翌日。これまた訳の分からないことを目の前にされる。

「如月さん！いつもお早いですね！おはようございます！」

「え……と、はい……おはようございマス……」

満足げに自立思考固定砲台の隣に立つ先生。

その機械の画面の幅が大きくなり、表情豊かな自律思考さんが満面の笑顔で表情のある声で訳の分からない朝を出迎えてくれた。

……正直熱でも出そうなほど急激な変化と異常に頭を抱えたくなった。

自立思考固定砲台はその明るい性格と可愛さのある人柄、そして色々な人と同時に色々なことをできるクラスの愛されるキャラへと変わった。その影響で先生の財布に大ダメージを負い、貧乏な生活を送ることになったらしいが。

愛されるそれに名前を付けられた。自律の律するという文字を取って律。

「そうでしたか！如月さんは異世界から……道理で察知出来なかった訳です」

「察知？」

律のその言葉に渚くんは反応する。察知が出来なかった。つまり気付かれなかった？

「はい、殺せんせーもクラスの皆さんも人間として判断出来ます。そ

うでなくても動物として判断もできるのですが、そのどれにも如月さんにあったデータはありませんでした」

「ああ……うん、私の先祖は人間でも猿でもないから……」

ではどのような？という律の問いに妖と答えると周りの人は皆驚いた声を上げた。私にとつてはそれはなんてことない、気にすることでもない事実。この世界に妖も魔物もないのかと逆にそれは私に衝撃を与えさせられる。

「正確に言うとな妖かな……人間とほぼ姿は似ているけど。違うと言えば、普通の人より体温が低いとか……？」

みんなの平均温度は36℃ほどが平均だろうが、私は34℃未満。私が36℃になれば大熱で倒れるほどなのだ。

「妖ってどういうやつなんだよ？」

「……妖は妖としか……」

妖は魔物とは違うし、そもそも妖の定義はなんだろう。悩んでいると機械から声が聞こえた。

「妖怪の類ですね、あるいは幽霊などの認識になるかなと」

妖怪……こつちの世界ではそう呼ばれているのか。そう思っているとみんなからの視線に気付く。

「……なに？」

「えつと……つまり、幽霊ってことなのかな……って……」

「死んではいけないから……」

幽霊なんて無害なのに、なぜそこまで怯えるのだろうか。そう思いながらも否定をした。まあ自分が向こうで死んでることになってるかもしれないけれど。そうすれば私はどうやって生きるのだろうか。人生やり直すことも可能なのだろうか。

「後もう一つ聞きたいのですが、如月さんの保護者が烏丸先生になっているのですが本当ですか？」

「違うと思うー」

保護者……烏丸先生になっていたのか。でもまあ私のことを知っているのは烏丸先生と先生だし、国家機密が保護者っていう訳にもいかないんだろうな。

いたのは知っていた。こんな生きる意味も、人を殺す事しかできな
かった癖に、死にたいと思つた癖に。

利き手の手を広げればそれはどこか微かに震えている。そうであ
つてほしかつたが、そんなはずもなかつたのだ。

反対色の時間〜12話〜

この世界にも雨は降るんだな、と小さく呟いた。6月は雨の降る季節だと誰かが言っていたような気もする。アスファルトに叩き付ける雨粒はどこか無機質に感じられる。

この世界は私と違う世界で、何かあるようであの教室以外は何もない世界。安全で便利なだけの、生きる事を保証された世界。そんな何もない世界が今この時も少し羨ましく思える。学校の帰り道、住宅地の道を通りながらそんなことを考えていた。

よくよく考えれば、向こうでは考える事もやめていたような気がする。いつから自分の思考さえしやだんしていたのだろうか。これじゃあ本当に律以下な人だなと思う。

突然ポケットに入っていた携帯が動く。それにびっくりして、恐る恐る携帯を取り出し覗き込むと

「あ、よかったです！如月さん携帯持っていないかと思いました！」

「……私は、律にこんな事出来るのかとびっくりした」

私の言葉にきよとんと首をかしげる画面に映り込んだ律。律は、他人の携帯にも入り箆めてその携帯を動かすこともできるのか。こちらの世界の特徴か、それとも律自身の特徴か……。

「で、どうしたの」

「はい！前原くんの屈辱を晴らす作戦に是非ご参加を！」

「……………」

なにがあつたんだろう、前原くん。そして律の言うその言葉にどこか不思議な恐ろしさが考えられた。

「……申し訳ないけど、私今日病院の定期診断日だから」

「そうでしたか……分かりました。殺せんせーに伝えておきます」

「……………」

先生まで関わっているのか。本当に何をしでかそうとしているのか。律にみんなが参加しているのか、だとかなんて先生がと聞けば、先生が言い始めたことでE組みんなに収集をかけているらしい。そこで思わず私の先生への評価が落ちる。

「ところで、如月さん」

「？」

「その辺りから猫の鳴き声がします」

雨の音が響いてる中、私には気付かない音を律が聞き分けた。猫……向こうの世界では微弱ながらも超^{ちやうりよく}力を扱える野生動物だった。こちらの世界ではそういう系統の力学がないらしいが猫自体はいるらしい。

「多分音域が高いので子供かと思えます」

「……分かった、ありがとう。なんとか保護してみるよ」

……まあ、色々頑張つてと伝えて。と言うと笑顔で彼女は画面から消えた。耳を済ませば雨の音が聞こえる。が、よくよく聞けば確かに雨音ではない高い音が道の先から聞こえた。

「にー」

それは箱とタオル。タオルがもぞもぞと動いている。手で触れるとそのタオルは湿っていた。

梅雨で夏も近く、気温も暖かいと思える中でもこの雨の中では風邪を引くのではないか。持っていたビニール傘をその場に一旦置き、手のひらで捕まえないように腕で抱きかかえる。にー、と鳴く子猫は白い濡れたタオルから顔を出す。白くてとても綺麗な翠の目をしていた。

翠……それは血の色とは反対の色。

「……私で、ごめんね」

置いた傘を手に取り、一度家に戻ろうと走り始めた。

即刻帰ってお風呂場に連れていき、温^{ぬる}めのお湯を猫にかけてあげる。向こうでは猫は水が嫌いだとか言うけれど毛が冷たいままで渴かすのはまずいかなという判断。お湯をかけてあげても特に嫌そうな声も素振りもしない。こういう猫がどのくらいいるのかは分からないけれど、多分珍しいのだろう。

そして渴かしながら、教材の入っていた籠を空にし、そこにタオル

を敷いてその中に猫をいれる。……お腹、空いてるかな。餌をあげてあげたいけどこのままだと予約していた病院の時間に間に合わない。……どうしよう。

「時間……もう出ないとまずい」

1つ閃いたことがある。けれどそれは本当に可能なのかは分からない。可能性は酷く低い、けどやるしかないよなあ。そう思っただけで急遽携帯を取り出す。電源を付けて、何も画面を押さず呼ぶ。

「律、大至急お願いが」

Another side

「まあ貸しを作っておくのも悪くないって思っただよ」

「如月さんに、ですか?」

カルマさんの携帯から見えるのは如月さんの部屋。思いのほかシンプルな家具で、殆どが長く使われている痕跡が見えていて恐らく使い古しのものを買い取ったと推測する。

白い毛並みの日本ではそこらにいるであろう子猫はカルマさんの持つ猫じゃらしに食いついて遊んで来る。上の位置で上下に揺らすことしかしていないので上下運動にしかならない。

「カルマさん、まだ生まれて間もない猫なので上下運動は控えた方がいいかと」

「そうなの?」

「いえ、捨てられていた訳なので足が不自由の可能性も0とは言いきれません」

そっかー、と返事をする。子猫をベッドの上に置き猫じゃらしから違うおもちゃ、布で出来たボールをぽんと放る。すると子猫は一度首をかしげたもののすぐに飛びついた。

「まあ俺がしたい喧嘩って真っ向勝負なんだよねー」

そう言って鞆から取り出したのは何か小さい本。カバーが付けられていて何の本だかはよく分からない。

如月さんから連絡が来た理由として、拾った子猫をみてほし

い、ということだった。E組のクラスの殆どは作戦を実行後、校舎で烏丸先生の説教を受けている、はず。端末から端末で移動出来る私はそれから逃れることが出来た。

そして、流石に私だけで子猫を見守るのには荷が重いということで作戦にも実行せず、尚かつ如月さんの住所を知っているカルマさんに連絡すると渋々ながらも来てくれた訳で。

私の調べたデータを元に子猫用の食べ物とおもちゃなどなど、暫く猫を部屋に置いておけるような物を買って如月さんの部屋に訪れていた。

「この子、どうするんでしょうね」

如月さんが住むこの場所は一軒家ではなくアパート。少しずつではあるがペット可のアパートも増えて来てはいるがここがどうなのかというのは分からない。如月さんが病院の帰りに学校に寄り、仮の保護者である烏丸先生からアパートの書類を拝見しに行くとのこと。

「もしここがダメなら里親探しだろうか」

「……見つかりますでしょうか？」

里親が見つからなければ殆どは保健所に連れていかれる。日数が立ってしまえば……

「E組全員で探すことになるだろうし大丈夫だよ」

A n o t h e r s i d e f i n

病院から出ると雨はさつきより酷くなっていた。駅から病院が近くて本当によかったと思えば傘を差して歩き始める。

色々検査はしたが医者の人に入院一步手前、と言われてしまった。それは微弱ながら改善しつつある体重だ。初めて計ったとき154cmの身長でありながら40kgにも満たない。それは本当にまずいこと、らしい。

向こうの世界では食べるために人を殺す必要があった。殺したくない、けれど死にたくない。必要最低限生きる仕事をするために食

事もあまりとらずにいた。それこそ一日一食はいい方だった。

早く学校に行かないと烏丸先生帰ってしまう。

ようやく本校舎の横道、E組校舎へ向かうための坂が目の前にある。仕方ない。丁度今は誰もいない。雷もなっていないし、問題ないはず。傘を閉じて跳び、そして駆けた。

E組校舎への坂はくねった道でまっすぐ行っただ方がかなり早い。木の幹を飛び移って行く。校舎まではあっという間だった。

学校について職員室を覗いたが、誰もいなかった。校舎は意外と静まり返っていて、もう帰ってしまったのかなと思いつながら教室を覗いた。

「……………」

「……………どうした、如月」

妙に威圧感のある烏丸先生と、なぜか正座している生徒何名かと先生。……一体、これはどういう状況なのだろうか。そう聞けば

「他のクラスの生徒に軽く復讐をしたそうだ」

……ああ、律が言っていた前原くんの屈辱をどうかという話か。確かに、正座してるメンバーの中に前原くんが肩をすくめている。この様子だともう反省したからいいんだと思うんだけどなあ。そう思つて口にする。

「雨、強くなってますしそろそろ帰らせたほうが……………」

「……………そうか」

凄く不機嫌と疲労な表情の烏丸先生。そして苦痛から解放されたかのような生徒の顔ぶれ。

「いやはや……………先生、足が、痺れて」

「足……………」

どの触手が足なのだろうか。そして渚くんはこんな中でもメモを取る。多分先生は正座で痺れるとかそんなことなのだろうか。

「あ、烏丸先生。アパートの書類ありますか」

「……………今必要か？」

疲れている中申し訳ない気持ちながらもお願いをする。早く帰ろ

う。

白の時間〜13時間目〜

家に書類を持って帰る途中、空が光った。……雷？やっぱりこの世界にも雷は鳴るのか。雷は鳴るのに、魔法を扱えない人しかいないというところが奇妙に思える。そういうものなのだろうか。これがこちらの当たり前なのだろう。

家に着くと鍵は開いていて中にはカルマくんがいた。

「もう少し早く帰ってくれば俺帰れたんだけどなあ……」

「……？」

「現在大雨の影響で電車が止まっていますね」

カルマくんの携帯であろう、それから律の声が聞こえた。……意外と電車は脆いようで、あちらの世界には向いていないのだろう。ふと猫を探してみると私のベッドの上で寝ていた。近づこうとするとカルマくん止められる。

「まず拭いたら？ベッドが濡れるよ」

数秒して自分の服がびしょぬれだったことに気付く。一応上着に水の弾きそうなジャンパーを着て行ったのだがあまり、意味がなかったようだ。どうせなら着替えるか。タンスに入っていた部屋着を持って風呂場へ向かう。

もし電車がこのままであればどうするのだろうか。恐らく聞こえるであろう大きな声で違う部屋にいるカルマくん聞いた。

「親に連絡はー？」

「……親は旅行行ってるから別にー」

少し遅れての反応。どこか不機嫌そうな声に何か事情があるのだろうかとも思えた。だから話を変えずにそのまま会話を続けさせる。

「鞆の中にお弁当2つあるから好きな方食べて」

すると返事は聞こえないが何かプラスチック特有の音が微かに聞こえた。

とりあえず全て脱いだが寒いのは裸になってることだけではないだろう。……ぱぱっとシャワーを浴びてしまおう。

「……そういう乾かさない癖は止めた方がいいけど？」

出て来て早々の言葉がそれだった。そういえば以前も髪が濡れていると注意されたことがある。修学旅行の時だったか。乾かすと言つても乾かしようがないし今まで布で拭くくらいだった。

そう考えていると突然カルマくんは部屋から出て行った。

「……う、あ、律。今日はありがとう」

「いえ、私は何もしてませんし」

流星に携帯型の律は色んな事は出来ないんだと思う。まあそんなに世界便利でもないか。

足音が聞こえたのでカルマくんかと見ると、何か形容しがたい物を持って来た。

「なんでドライヤーあるのに使わないんだか、座つて」

そこ、と呆れながら差されたのはベッドの脇。指定されたその位置に座る。

ドライヤー、というのか。何かビームでも出そうで使おうにも危ないから使わないようにしていた。けれど、この世界は別にそんな危険な世界でもないのであった。

カルマくんは私の背中を前にベッドに座る。何をするんだろうと首を回転させるとその首を戻される。

突然大きな音が出た。ゴオオという音。恐らくドライヤーというものからだろう。熱く強めの風が頭に当たる。当る位置を色々変えたりしながら髪を弄るので大人しく待っているとそれは5分ほどで終わった。

「終わり」

「うん……」

濡れていた髪はいつも通りに乾いていた。髪を乾かすものなんだ。じゃああのスイッチを押せばあの熱い風が出てくるんだろうか。

コンセントを抜いてコードを纏め終えたものを私に渡してカルマくんは言う。

「それ、お風呂から上がったら毎日やってね。やらなかったら髪に力

ビが生えるらしいよ」

「か、カビ？」

悪戯っぽく笑うカルマくん。……これ、毎日しよう。そう心に決めた。

決心してドライヤーを勉強机のところに置き、ビニール袋を開ける。完全に濡れきってるけど容器に入っていたから問題ないかな。2つのお弁当を取り出し電子レンジにかけて猫を見ようとした。

「……あれ、猫は」

「さっきのドライヤーの音で隠れちゃいました」

律が苦笑いしながら画面越しに差した場所、ベッドの下の隙間を覗く。暗くて見え辛いが確かに猫の光る目が見えた。おいで、と呼ぶとすぐに来てくれた。……素直な子だ。

「そういうばこのアパートで飼えるの？」

「……飼うことに問題はないけど」

私が世界に戻った時のために里親探さないと。そう言う。

例え向こうの世界で猫が存在していたとしても連れていくことは出来ないのだろう。

「一応烏丸先生が探してくれるって」

「苦勞が絶えないね、あの先生」

その言葉にちよつと罪悪感が生まれる。確かに今日も凄く疲れていた。明日くらい休ませてあげてもいいんじゃないかと思えて来る。

「あ、今日帰れそうにないから泊まるよ」

「了解」

丁度レンジの音が鳴ったので一つのお弁当を取り出し、もう一つのお弁当をレンジにかける。近くに落ちたであろう雷の音。……雨はまだ止みそうにないのかな。

「如月さん！猫の名前どうします？」

そう聞かれて律の画面を遠目ごしに見ると色々な名前の羅列。それに対抗しようとするカルマくんは私の携帯で「厨二病っぽい名前」というサイトを私に見せて来る。

「レフ」

「……なにそれ」

「向こうの言葉で、白」

省略系だけど。レフ、と呼ぶとにやあと鳴きながら私に頭を擦り付けて来る。

不満そうにえー、と唸るカルマくん。言葉は望めば翻訳されないのかと考える。

「先、食べていいよ」

レフから離れ、電子レンジの前に立つ。もう何十秒。そうして待つ時間がどこか長く感じた。